

2012年度インターゼミ（社会工学研究）

東北を活性化する コミュニティ形成

～福島県平田村を事例にして～

<指導教授>

久恒啓一 教授

長田貴仁 客員教授

<執筆者>

地域・震災班

多摩大学 経営情報学部

梅田裕介

古西政樹

角野匡子

多摩大学大学院 経営情報学研究科

川合紀子

武田一斎

提出日：2013年1月19日

はじめに

第1章 研究の背景・目的

第2章 福島県平田村の紹介

1節 概要と魅力

2節 村民の思い

第3章 現状と問題点

1節 人口減少と高齢化

1項 福島県

2項 平田村

2節 福島県の産業

1項 県内総生産からみた産業

2項 産業別の概要と課題

3項 平田村の産業

3節 東日本大震災

1項 震災の概要

2項 原発の影響

第4章 事例研究

1節 道の駅

1項 概要と意義

2項 道の駅「ひらた」の紹介

2節 グリーンツーリズムを通じた地域振興

1項 福島県平田村 「いきつけの田舎プロジェクト」

2項 大分県安心院町 農泊

3節 コミュニティ形成を通じた健康長寿 山梨県桐原地区

4節 花を通じた地域活性化 大分県くじゅう花公園

1項 ビジョン

2項 立地

3項 花公園の運営と特長

第5章 事例の提案

1節 農泊体験を通じたコミュニティ形成

1項 平田村の立地・環境的価値

2項 SOHO の仕組みを使った農泊プラン

3項 道の駅「ひらた」のコミュニティスペースとしての活用

4項 農泊体験の具体例

2節 花を通じた復興と地域振興

1項 花を用いた被災地支援プロジェクト「絆フラワー」

2項 平田村型グリーンツーリズム「花泊」

3項 「ジュピアランドひらた」の活用

4項 フェイスブックの活用

5項 桜を通じた多摩との連携

6項 SOHO の活用

おわりに

参考資料

参考文献

はじめに

多くの人々を傷つけた東日本大震災からまもなく 2 年が経とうとしている。マグニチュード 9.0 の大地震と巨大津波は、実際に被災した人ばかりか、関東に住む私たちの心にも、未だに強く焼き付いている。また、今回の震災では、福島第 1 原子力発電所で未曾有の事故が発生し、今も目に見えない放射能汚染が、多くの人々の生活を苦しめ続けている。

勿論、この 2 年という月日の間に様々な問題が解決された。津波の被害を受けた海岸沿いは整理され、宮城県、岩手県の災害廃棄物の撤去が進んでいる。東北の中心都市である仙台に至っては、復興需要で大いに賑わっている。

しかし、震災が発生した東北は、そもそも人口減少と高齢化という問題を抱えた地域であるということを決して忘れてはならない。国土交通省が震災前に作成した東北圏の人口予測によると、平成 24 (2012) 年、1168 万人だった人口が 2050 年には 727 万人に減少するとされている。東北を元の姿に戻すことだけでは、その地域の課題を解決することにはならない。

また、福島第 1 原子力発電所の事故は、これらの問題をより深刻なものとしている。放射能汚染の影響は目に見えないだけでなく、今後、何年にわたり、どのような影響を与えるかも定かではない。

地域＜震災＞班は、このような状況下で、縁あって「福島県平田村」にインタビューすることができた。短い間に 3 回も訪れた平田村は、田園の広がる日本の原風景ともいえるすばらしい村であった。今年も作付けを行っていて、秋に訪れた際、稲穂が見事に実る光景は、被災地であることを忘れさせるほどであった。

私たちはこの平田村が抱える人口減少と高齢化、震災の影響に向き合い現状を的確に把握する。そして、この現実という厚い壁を乗り越えていくための構想を検証し、東北の方々が希望を持って生活していけるための提案を行う。

第1章 研究の背景・目的

東北地方は、震災前から人口減少、高齢化が特に進行していた地域であった。そこに平成23(2011)年3月11日に発生した東日本大震災という未曾有の非常事態が発生し、震災以前から存在していた問題に拍車をかける形となった。とりわけ、原発事故の影響を受けた福島県への影響は根が深く、早急に今後のビジョンを描き、実行する必要がある。

具体的な研究の対象とする「福島県平田村」も以前から人口減少、高齢化が進んでいた場所であった。そして、原発の風評被害が1次産業を中心とする平田村に深刻なダメージを与え続けている。そのため、私たちは平田村に焦点を当て、人口減少、高齢化と震災の被害に苦しむ地域に対して、将来に向けて、希望を持って生活し続けるための施策を提案することを目的とする。

なお、福島県平田村に焦点を絞るに至った経緯であるが、私たちは、日本の多くの地域が抱えている「人口減少と高齢化」と、東日本大震災の「被災の影響」の双方に問題意識を持っている。また、双方の問題を認識することは勿論、解決に向けた具体的な提案を描きたいという強い思いがあった。そのため、地域を絞って研究し、宮城県、福島県を中心に、双方の問題を抱えながらも、活性化に向けた取り組みを行っている地域を探していた。その中で、多摩大学総合研究所を通じて出会ったのが福島県平田村であり、道の駅ひらたの職員を中心として、人口減少と高齢化の問題だけではなく、東日本大震災の原発事故による風評被害の影響を受けている地域で活性化に向けた活動を行っていることを知った。私たちはこの出会いを通じて、平田村に3度、現地視察を行うことができ、知識と体感を得ることができた。本論文へはこの現地での貴重な経験を活かしていく。

地域・震災班 研究の流れ

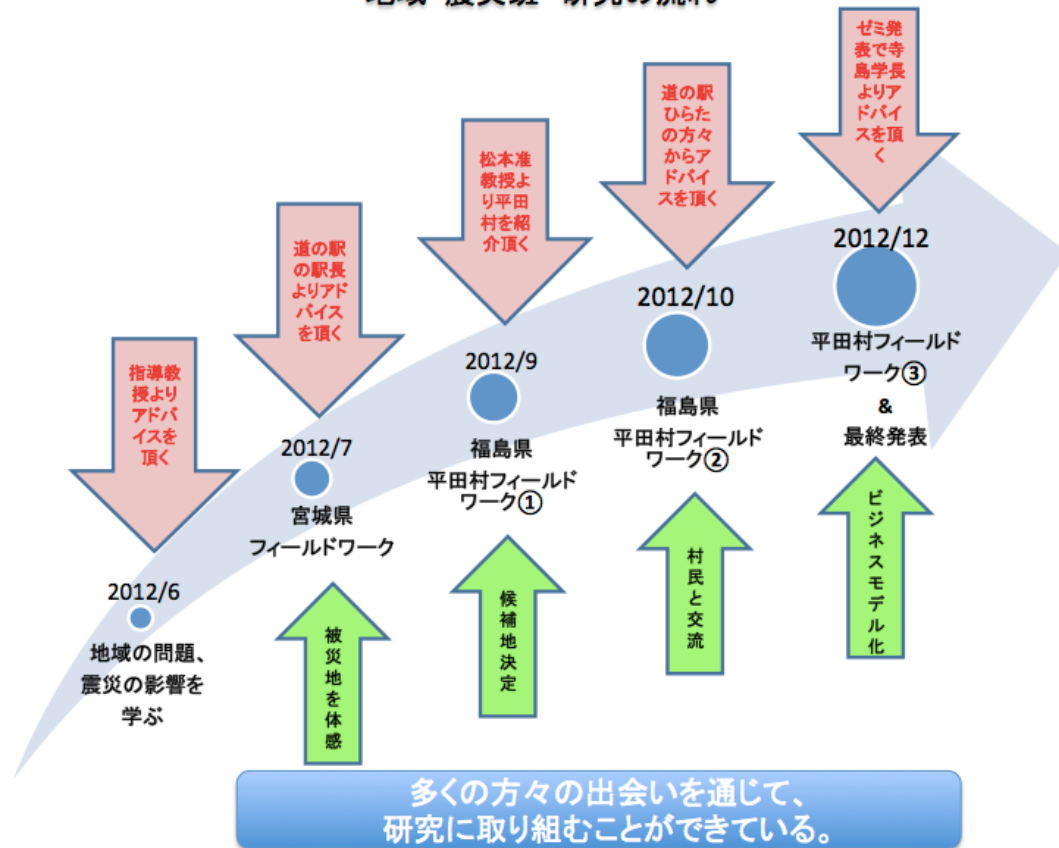


図1：地域・震災班 研究の流れ

第2章 福島県平田村の紹介

1節 概要と魅力

福島県石川郡平田村は周囲を山に囲まれた地形で村内には国道49号線とあぶくま高原自動車道が通る。新幹線最寄り駅は「郡山駅」でそこから車で約1時間を要する。昭和30(1955)年、蓬田村と小平村の2村が合併して平田村が誕生する。平成16(2004)年11月25日、あぶくま高原道路の平田ICと小野IC間が開通した。

主産業は農業で、特に「たばこ」や「そば」が盛んである。また特産物には自然薯、地酒、しいたけ、高原野菜などがある。道の駅「ひらた」の食堂では平田産そば粉を使用した手打ちそばを堪能できる。

旧・庄屋の屋形を復元した、江戸時代の生活文化にも触れられる。伝統文化など保存伝習施設「樹里庵」があり、これは江戸期(1791年)に東山村の庄屋を務め、代々農業を営んできたという鈴木家の住居を移設し復元したもので、日常生活を送っていた居住部、農作業をしていた作業場、馬場などが忠実に再現されている。また、見学科は無料である。

村内には東北百名山、日本百低山に指定された蓬田岳(標高952.23m)があり、この村のシンボルとされ、頂上からは遠く那須連峰や太平洋を望める。かつては山岳信仰の山とし

て多くの修験者が訪れ、山頂には今も修験者達の名残として、畑跡や修験の志水、修験座などが残されている。

近くには豊かな自然を生かした観光レクリエーション施設「ジュピアランドひらた」は平成24(2012)年5月22日にオープンした「東京スカイツリー」の高さと展望デッキの標高が同じであり、登山や森林浴、野鳥観察、デイキャンプなどの基地として親しみを持つ。また、園内には1.7haの面積に約14万株の芝桜が植えられており、毎年4月末～5月中旬にかけて行われる「ジュピアランドひらた芝桜まつり」には県内外から多くのお客様が訪れ、見る人に感動を与える。

ジュピアランドひらた 634

標高 634m!! 東京スカイツリーと同じ高さです!!

展望デッキ 標高634m

東京スカイツリー 全高634m

最高の眺め!! 皆様お待ちしております!!

「ジュピアランドひらた」にある野鳥観察の展望デッキは、2012年5月22日にオープンした「東京スカイツリー」の高さと展望デッキの標高が同じであるため「ジュピアランドひらた634」と名付けられました。平田村のシンボルである標高952mの蓮田岳山麓の豊かな自然を生かした観光施設「ジュピアランドひらた」には、1.7haの面積に14万株の芝桜が植栽されており、5月中旬には見頃を迎え、赤やピンクの芝桜が一面に咲き誇り、まるで花のじゅうたんを敷き詰めたかのような光景は見る人に感動を与え、連日多くの観光客で賑わいます。野鳥の森、バーベキュー場、キャンプ場、ゲートボール、グラウンドなどがあり、登山道も整備され、ツツジや白樺、紅葉など四季を問わず家族連れで自然を楽しむ人気スポットです。

5月中旬頃の風景

ジュピアランドひらた / 福島県石川郡平田村大字蓮田新田字蓮田岳地内 TEL.0247-55-3535

平田村 平田村役場
〒963-8292 福島県石川郡平田村大字蓮田字広町34番地
TEL.0247-55-3111 FAX.0247-55-2452

「ジュピアランドひらた」ポスター (資料1)



2012 年度芝桜まつり告知ポスター（資料 2）

他に 8 月 13 日～14 日に駒形ジャンガラ念仏踊りや 8 月中旬にはサマーイルミネーションフェスタなどのイベントが催される。



図 2：福島県市町村マップ

平田村は県南東に位置し、いわき市などに隣接している。

¹ 福島県市区町村マップ <http://www.mapion.co.jp/map/admi07.html>（参照日：2012 年 12 月 22 日）

道の駅「ひらた」の周囲は豊かな自然に溢れており、桜が有名な観光スポットである。



撮影：風景情緒溢れる平田村（資料3）

2 節 村民の想い

さかのぼること18年前の平成7（1995）年に平田村では「どんな村にしたいか」をテーマに村民アンケート調査が実施された。村民の71.6%という高い有効回答率から村民の積極的な参加がうかがわれる。当時の資料から満足度調査では「緑の豊かさ」「水のおいしさ」という点では50%以上の村民満足度がある反面、生活環境（幹線村道の整備、子供の遊び場、河川・水路、生活道路、河川のきれいさ、下水・排水処理）においては、50%以上の村民が不満を持っていた。これらの要望を基に、村道の整備が行われているがこれは図3（平成24年度3月に作成された都市再生整備計画（第5回変更）上蓬田地区 福島県平田村 p6）にも地域生活基盤施設（道路）整備と表記されており民意が反映された形となっている。

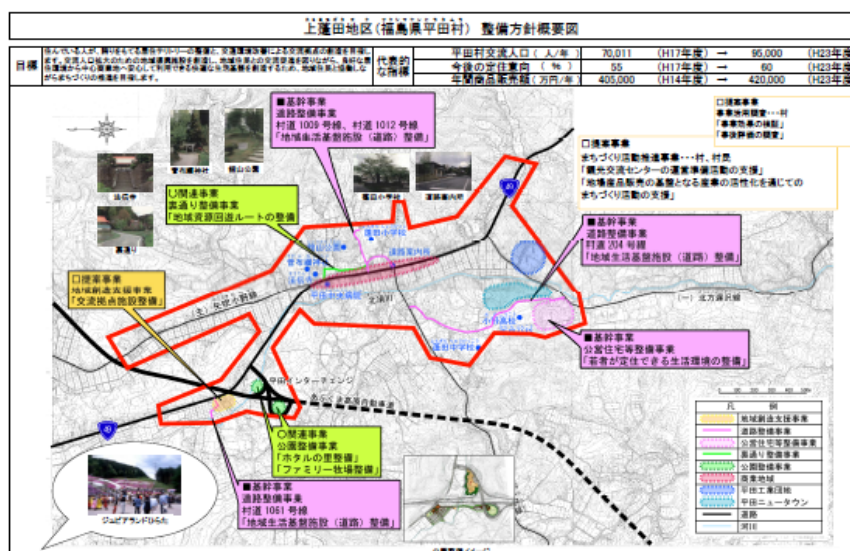


図3：都市再生整備計画（第5回変更）上蓬田地区より抜粋²

² 都市再生整備計画（第5回変更）上蓬田地区、福島県平田村（参照日：2012年12月22日）

しかし同アンケート調査の21世紀の平田村にふさわしい言葉として村民が選んだ理想とする平田村の姿には、「緑豊かな」「活力のある」「活気のある」「ふれあいのある」など環境を維持し、雇用の創出と村民間のコミュニケーションを願う意向が表されている。³ 当時から18年が経ち、平田村の村長澤村和明氏は平成25(2013)年の年頭所感に、「未来へつなぐひらたの誇り、協働の村づくりを目指して」とある。また、「村民1人ひとりが参画する住民との協働の村づくり」即ち、村民の力と想いを持って持続可能な村づくり（あたたかい平田村、みちびきの平田村、みんなで作る平田村）を推進しようとしている。平田村の想いに対して、第5章1節「農泊」体験を通じたコミュニティ形成と2節「花を通じた復興と地域振興」を事例として提案させていただきたいと考える。

第3章 現状と問題点

1節 人口減少と高齢化

1項 福島県

平成24(2012)年10月1日現在の福島県の人口⁴は196万2333人となっている。福島県の人口は年々減少しており、平成7(1995)年は213万3592人⁵いたが、平成18(2006)年には210万人⁶を切り、さらには平成24(2012)年では、200万人を切った。3年ごとに0.5%～1.5%の減少率となっている。また平成23(2011)年に東日本大震災が発生し、平成21(2009)年と平成24(2012)年の3年間の減少率は、3.94%となり、平成21(2009)年から2倍以上の減少率となっている。

福島県全体の高齢者の割合は、平成24年現在では、26.0%にのぼる。これは、平成24(2012)年5月現在の全国の老年人口の割合の23.7%⁷を上回る数値であり、10月の概算値では、24.1%となっており、福島県は全国の中でも高齢化が進んでいる都市であることが分かる。平成7年では17.4%であったが、年々上昇し続け、平成21年には人口の4分の1に当たる約25%が65歳以上の高齢者である。

³ 平成7年度平田村広報より抜粋(参照日:2012年11月10日)

⁴ 平成24年10月(2012)国勢調査福島県推計人口より抜粋

<http://www.pref.fukushima.jp/toukei/data/01/jinkou/jinkou24/10.xls>(参照日:2012年11月10日)

⁵ 平成12年福島県国勢調査第1表 人口、人口増減(平成7年～12年)、面積及び人口密度

<http://www.pref.fukushima.jp/toukei/data/02/kokusei1ji/kokusei1ji.xls>(参照日:2012年11月10日)

⁶ 福島県人口動態

<http://www.pref.fukushima.jp/toukei/data/01/jinkou/jinkou18/1810s.xls>(参照日:2012年11月10日)

⁷ 総務省統計局 年齢(5歳階級)、男女別人口(平成24年5月確定値、平成24年10月概算値)

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/Xlsdl.do?sinfid=000014905014>(参照日:2012年11月10日)

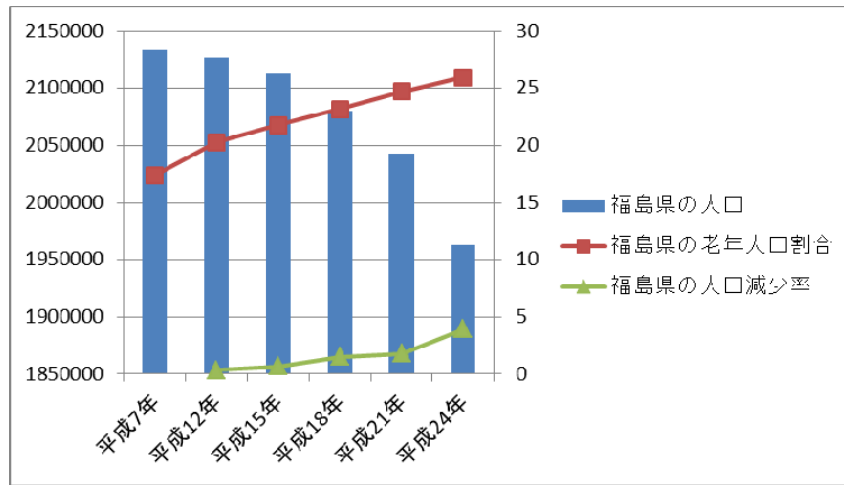


図 4：福島県の人口・老年人口割合と人口減少率

出典：国勢調査・福島県推計人口

2 項 平田村

平田村も人口が年々減少している。福島県全体の減少率よりも高い減少率になっており、3%~5%の人口減少となっていることがわかる。⁸ また、年によって減少率は大きく変動しており、平成7（1995）年からの5年間で人口は約4000人減少し、減少率は4.96%となった。平田村の高齢者率は、福島県全体の高齢者率とほぼ等しく、年々上昇こそしているものの、福島県内でも平均的な高齢者率であるといえる。

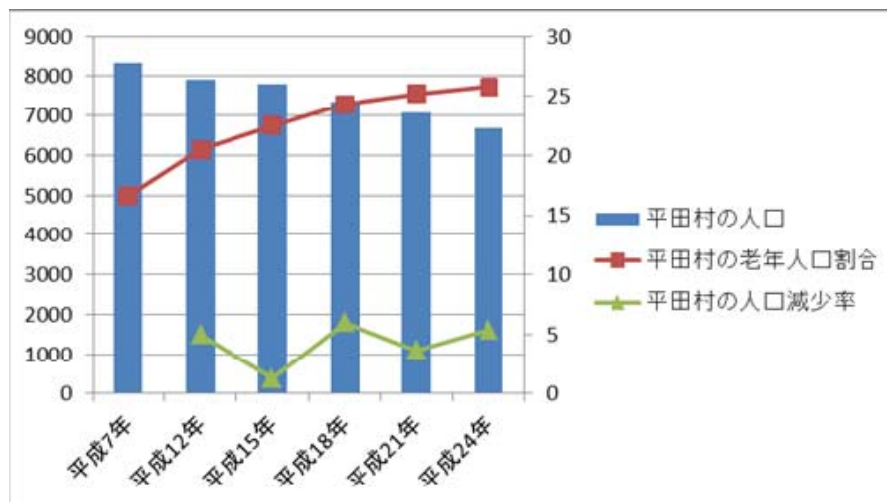


図 5：平田村の人口・老年人口割合と人口減少率

出典：国勢調査・福島県推計人口

⁸ 福島県推計人口より作成（参照日：2012年11月10日）

福島県では震災の影響で人口減少が加速した。特に海側の地域であるいわき地域や相双地域（相馬市、南相馬市、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、新地町、飯館村）には深刻な人口減少を及ぼした。しかし、平田村や浅川村などの比較的海に近い内陸部では、人口は減少しているものの、大きな人口減少には至っておらず、東日本大震災の影響は比較的軽微な地域であったことがわかる。

2 節 福島県の産業

震災復興の遅れと原発事故後 2 年近くを経過してもなお、国民の不安を助長する風評被害が 1 次産業を圧迫していると考えられる。昨年の宮城県研究に引き続き、福島県という県単位で捉え、本節では平成 20（2008）年と平成 22（2010）年の産業構造を比較し、震災後各産業においてどのような変化があったかを人口面・産業面から分析する。

1 項 県内総生産からみた産業

（ア）産業の分布

一般的に産業は、1 次・2 次・3 次産業に分類され内訳は以下のとおりである。

1 次産業：農業、林業、水産、2 次産業：鉱業、製造業（食品加工を含む）、建設業、3 次産業：サービス業（電気・ガス・水道業、卸売・小売業、金融・保険業、不動産業、運輸・通信業）、サービス業（政府サービス及び非営利サービスによる生産金額はふくまれていない）。

図 6 の産業分布図から、福島県の生産金額別産業の分布は 1 次産業(2%)、2 次産業(33%)、3 次産業(65%)となっており、2 次・3 次産業に比べて、1 次産業の 1 人当たりの生産金額及び従事する人口割合も低い。

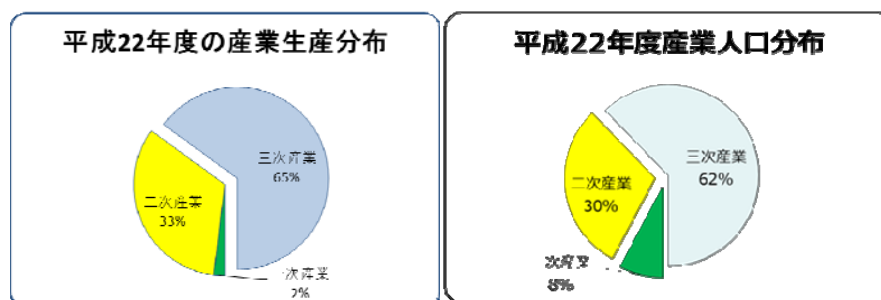


図 6：県統計分析課「福島県民経済計算の概要」⁹

平成 22（2010）年度県統計分析課「福島県民経済計算の概要」¹⁰の数字から産業全体で

⁹ 福島県統計分析課資料より作成

¹⁰ 平成 22 年度県統計分析課「福島県民経済計算の概要」

<http://www.pref.fukushima.jp/toukei/data/02/kenmin22/2010souki.pdf> (参照日：2012 年 11 月 10 日)

は、県内総生産は7兆2,015億円となり、平成21(2009)年度と比較して266億円(0.4%)減少した。1次産業の産業全体に占める割合は2%と非常に低いが、平成21(2009)年度1,903億円に対して平成22(2010)年度は1,771億円と7%減である。しかしながら、果物の東南アジア向けの輸出は増加した。

(イ) 産業生産分布と従事人口

このような産業構造の背景には、3次産業の成功がみられる。歴史と自然を中心とした会津地区と県北(温泉が中心)及びスパリゾートハワイアンズに代表されるいわき市に3次産業従事者の雇用が創出されており、福島県の雇用(約56万人)を支えてきた。

圏域	人数(万人)	構成比
県北	1,092	19.1%
県中	825	14.4%
県南	301	5.3%
会津	1,515	26.5%
南会津	370	6.5%
相双	538	9.4%
いわき	1,077	18.8%
計	5,718	100.0%

図7: 平成22(2010)年観光圏別観光客入り込み状況¹¹

2項 産業別の概要と課題

(ア) 社会環境変化の農業への影響

1項では福島県の産業人口全体の65%が3次産業に従事していることを述べたが、ここでは福島県の1次産業を取り巻く社会環境の変化について分析する。図7の通り平成20(2008)年の1次産業生産額は福島県の産業生産の2%に過ぎない。生産金額の減少は福島県のみならず日本の生活環境の変化によるところが大きい。福島県の総世帯数に占める農家率の割合は昭和60(1985)年の24.1%に比べ平成22(2010)年には13.4%にまで低下している。¹²

また、25年間に高齢化、食生活の変化(図8参照)による米離れ、ライフスタイルの変化は全国的なものとなり、福島県もその大きな影響を受けている。

日本人の食生活の変化

消費カロリー数(kcal)	昭和60年	平成21年	伸び率
米	727	570	-22%
小麦	320	321	0%
畜産物	164	384	134%
油脂類	159	331	108%

図8: 農林水産省「食料需要表」より抽出

¹¹ 福島県観光客入込状況(参照日:2012年11月10日)

¹² 福島県農林水産業の現状 p.11 資料:農林水産省「農林業センサス」、総務省:「国勢調査」(参照日:2012年11月10日)

(イ) ブランド化

しかしながら福島県の1次産業活性化への取り組みは、『ふくしまの恵みイレブン』と呼ばれる福島が誇る11種類の農産物のブランド化確立を目指し、国内生産及び海外輸出に力を入れてきた。

ふくしま恵みのイレブン

	ふくしまイレブン	単位	全国	ふくしま	全国シェア(%)	全国順位	1位
農産	水稲収穫量	t	8,478,000	445,700	5.3	4	新潟県
農産	もも	t	136,700	28,200	20.6	2	山梨県
農産	日本なし	t	258,700	23,200	9.0	3	千葉県
農産	きうり	t	587,800	49,400	8.4	3	宮崎県
農産	とまと	t	690,700	28,700	4.2	7	熊本県
農産	アスパラガス	t	31,100	1,070	6.3	5	北海道
農産	りんどう白荷量	千本	88,000	3,950	4.5	3	岩手県
農産	肉用牛養頭数	頭	2,892,000	78,200	2.7	10	北海道
農産	肉用若鶏飼養羽数	千羽	107,141	1,109	1.0	21	鹿児島県
水産	ヒラメ漁獲量	t	7,218	813	11.3	2	青森県
林産	なめこ生産量	億円	26,138	2,136	8.2	4	長野県

図9：福島県農林水産業の現状より抜粋作成

「ふくしまイレブン」ブランド化によって、桃と梨の生産は全国2位、3位を占めており、東アジアへの輸出¹³が軌道に乗り始め、平成21(2009)年度から平成22(2010)年度にかけての2~5倍の伸びを示していた。その一方で、東日本大震災及び福島第1原子力発電所の風評被害のため、野菜や果物の輸出量の落ち込みが懸念されている。

対中国(香港)輸出数量比較		H21年	H22年	増加率
もも(川中島)	(kg)	1,660	9,925	597.9%
梨(秋峰)	(kg)	857	1,100	128.4%
梨(幸水)	(kg)	7,285	9,825	134.9%

図10：福島県農林水産業の現状 p.7 「県農産物流通課しらべ」より抜粋

(ウ) 福島の農業生産法人の活動とその成果

農業従事者の減少と米の消費量の減少という1次産業を取り巻く環境の変化に対し、農業生産法人による農業の維持(食糧自給率の維持)活動は福島においても見られる。まず、農業生産法人とは農業法人の中に農地を持たない農業法人(一般農業法人)と農地を有するまたは借りて農作できる団体と農業生産法人に分かれる。

¹³ 県産農産物の輸出量実績(県農産物流通課調べ)
http://www.cms.pref.fukushima.jp/download/1/nourinkikaku_genjyou_all.pdf (参照日:2012年11月10日)

農業生産法人として農業ができるためには、以下の要件を満たす必要がある。

- (1) 企業形態（農事組合法人、合名会社、合資会社、合同会社、株式会社のいずれかであること）
- (2) 事業要件（主たる事業が農業及びその農業に関連する事業であること。）
- (3) 構成員要件（それぞれの企業形態において組合員や社員や株主であること。構成員になることが出来るのは農地の権利を提供した個人、法人の農業従事者など
- (4) 経営責任者要件（役員の過半数が農業に常時従事していることと 60 日以上農作業に従事していること）

上記条件を満たす農業法人は 12 法人あるが、飯館村や南相馬市の 4 生産法人については、原発事故の影響などから活動が停止していると判断する。会社法人としてはスーパー大手の株式会社イトーヨーカ堂が千葉をはじめ全国に農業協同組合と共同で株式会社セブンファームを立ち上げている。福島県でも他の農業県と同様、過去の減反政策から農耕に土地が適さなくなり、さらに後継者問題（高齢化や後継者不足）、耕作放棄地の増加などから平成 20（2008）年に「耕作放棄地等再生利用緊急対策交付金」が計上され、郡山市に拠点を置くアグリプロ 8 丁目が活動している。

平成 22（2010）年度の平田村農業委員会の報告書からは、本研究に関わる平田村における農業生産法人は“ゼロ”である。

（エ）福島県の第 2 次産業と第 3 次産業

2 次産業は特に浜通り地域を中心に展開されている製造業と建設業は福島県の産業生産の 33%¹⁴（平成 22 年）を占めていた。平成 20（2008）年の相双地域といわき地域¹⁵の 2 次産業のみの総生産額は約 4681 億円で福島県 2 次産業の 30%である。3 次産業も同様に浜通り地域を中心に、電気・ガス・水道、卸・小売業、不動産業・サービス業の生産額は約 6487 億円で、福島県全体に占める割合は 35%¹⁶であったが、いずれの場合も電力産業に依存した産業構造となっている。¹⁷

14 福島県統計分析課資料より作成した図 3 のグラフ参照（参照日：2012 年 11 月 10 日）

15 相双地域といわき地域は脚注 12 を参照（参照日：2012 年 11 月 10 日）

16 平成 24 年 2 月 9 日福島県復興・総合計画課資料 p.8（参照日：2012 年 11 月 10 日）

17 平成 24 年 2 月 9 日福島県復興・総合計画課資料 p.8（参照日：2012 年 11 月 10 日）

東日本大震災後の福島県推計人口資料					単位: 100万円
	一次産業	二次産業	三次産業	その他	総生産額
相双地域	21,745	201,997	795,928	114,376	1,134,046
いわき地域	16,726	468,172	648,696	149,011	1,282,605
(相双-いわき)が 福島県に占る割合	25%	30%	35%	24%	32%
福島県全体	155,815	2,264,967	4,145,620	1,100,543	7,666,945

図 11：平成 20 年 福島県と浜通り地域の産業構造

原発事故と震災が産業に及ぼす影響として、人口の流出が挙げられる。平成 23（2011）年は例年 3 万人を上回る人口減少となった。県外避難者数（約 60,000 人）のうち住民票を移動していない人が含まれているため、実際の県人口は 198 万人を下回ると推測される。¹⁸ 人口流出は 2 次産業同様サービス業のみに特化し総生産額を福島県全体と比較すると全体の 26%¹⁹を浜通り地方で貢献しており、平成 23（2011）年度の人口流出²⁰は浜通りの全市町村から郡山市にも及んでおり、風評被害を含め 3 次産業への影響は避けられないと予測される。

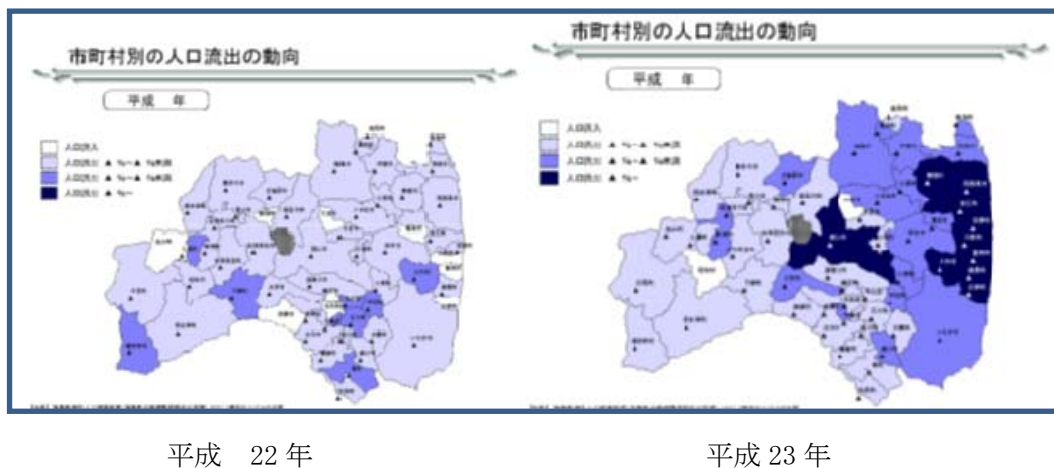


図 12：市区町村別の人口動向

また、警戒区域及び緊急時避難区域に設定された原発から 30 キロ圏内²¹に本社のある企

18 平成 24 年 2 月 9 日福島県復興・総合計画課資料 p.3（参照日：2012 年 11 月 10 日）

19 東日本大震災後の福島県推計人口（平成 24 年 2 月 9 日、福島県復興・総合計画課）p.9 より作成（参照日：2012 年 11 月 10 日）

20 東日本大震災後の福島県推計人口（平成 24 年 2 月 9 日、福島県復興・総合計画課）（参照日：2012 年 11 月 10 日）

21 北海道新聞 2011 年 4 月 21 日版（参照日：2012 年 11 月 10 日）

業は平成 23 (2011) 年 4 月 8 日発表分で 2,207 社 (東京商工リサーチ調べ) の労働者らは、県外や区域外へ避難しており通勤時増、被ばく量が一定以上になった場合は就業を停止しなければならないため、当地での操業や従業には大きな課題を残している。²²

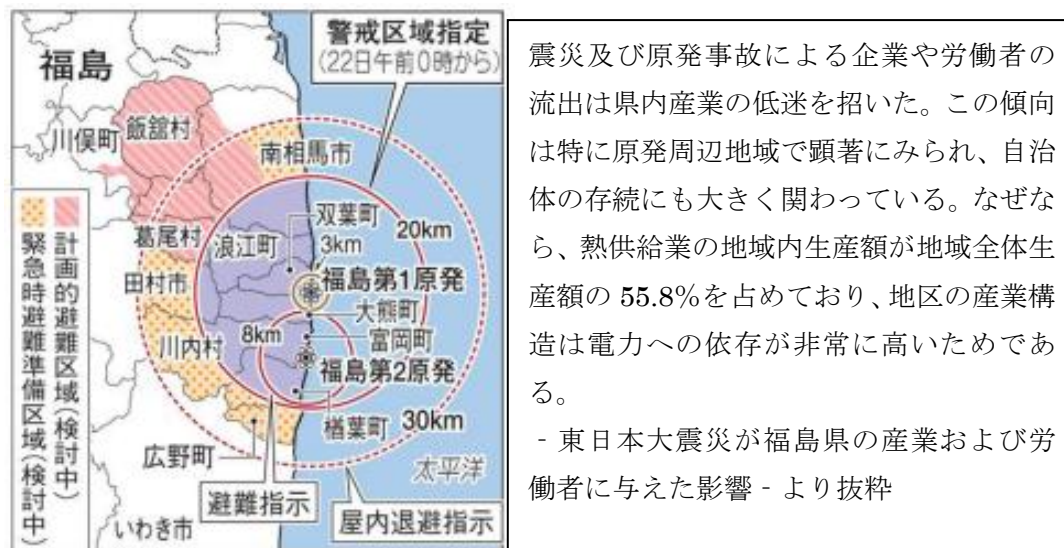


図 13：計画的避難区域

これまで浜通り地域を中心とした 2 次・3 次産業について述べてきたが、福島県全体では三春駒、白川だるま、赤べこ、こけし、会津漆器、タンスをはじめとする桐製品、陶器や磁器 (本会津焼) などの伝統工芸品、織物 (昭和村からむし織、旧梁川町のニット製品、絹製品、会津木綿など) がある。特に、雇用を創出し、県経済を担っている主要 3 次産業は、会津地方の温泉やスキーリゾートを中心とした観光及び、いわき市のスパリゾートハワイアンズなどがあげられる。²³いわき市は県内 3 位で、8,153 億円 (平成 20 年 (2008 年) 福島県発表データ) である。

²² 産衛誌東日本大震災が福島県の産業及び労働者に与えた影響 (参照日：2012 年 11 月 10 日)

²³ 福島県観光客入込状況 平成 22 年 p.3 (参照日：2012 年 11 月 10 日)

(単位:千人, %, 地点)

圏域	22年		
	人数	構成比	地点数
県北	10,923	19.1	78
県中	8,253	14.4	65
県南	3,014	5.3	38
会津	15,147	26.5	98
磐梯・猪苗代	5,484	9.6	32
会津西北部	2,952	5.2	23
会津中央	6,711	11.7	43
南会津	3,691	6.5	25
相双	5,384	9.4	40
いわき	10,767	18.8	29
計	57,179	100.0	371

観光圏域別観光客入込数の構成比

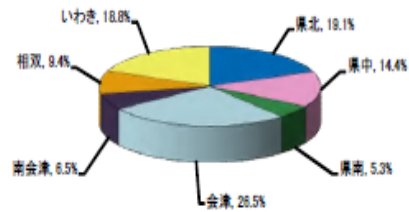


図 14：観光圏域別観光客入込状況

図 15：観光圏域別観光客入込数の構成比

3 項 平田村の産業

(ア) 村内総生産からみた産業

平田村は産業構造において農業が占める割合が高い。図 16 のとおり、平成 20 (2008) 年度では、1 次産業の就業者の割合は、24%と福島県全体の 8%より遥かに高い。実際に行ってみると、この分布が一目で分かるのだが、山間部へ見事に田畑が広がっている。道の駅ひらたの職員の方から伺ったのだが、平田村の面積は 80%が山で、その他は畑、道、家しかないそうだ。このような環境下であると、原発事故の風評被害の問題は、より一層、強い影響を及ぼす事が想定される。

また、図 17 のデータは平成 20 (2008) 年度と震災前のデータとなるが農業の就業者数が 24%であるのに対して、生産額は村の 9.4%に留まっている。他の産業と比べると、人数がいるにも拘らず、収益が少ない。そして、図 17 の通り、単純に統計データから 1 人当たりの生産額を計算すると 1 次産業の生産額は年間で 176 万円。それに対して、2 次産業は 461 万円、3 次産業は 646 万円。勿論、専業農家の割合が 11%と低く、一概に 1 次産業従事者の所得が著しく低い訳ではないが、1 次産業の震災前から農業の生産性が低いことが理解できる。

先にも述べたが、平田村は、1 次産業の占める割合が大きい。しかし、生産性は低いと言わざるをえない。そのため、この項では、課題の多い 1 次産業を中心に平田村の姿をみていくこととする。



図 16：平田村産業別就業者・生産分布
 出典：平成 20 年 平田村統計「平田村のすがた」²⁴

産業	労働人口 (人)	生産額 (百万)	1人辺りの生産額 (万)
1次産業	1,026	1,805	176
2次産業	1,823	8,394	460
3次産業	1,386	8,951	646
計	4,235	19,151	

図 17：平田村 産業別精算額一覧

平田村の 1 次産業の構成を検証してみると、図 18 の通り、肉用牛が 14.8%と多くを占めていることに気付かされる。これは、平田村は石川牛というブランド牛を生産しており、付加価値の付いた品物を出荷できていることに起因している。

一方で、米作りの産出額が少ない事実も浮き彫りにしている。図 18 の通り、米の出荷額は 54 千万円となっており、肉用牛の出荷額と殆ど変わらない。ただ、図 18 から分かるように、肉用牛は 216 戸であるのに対して、米は約 3 倍の 661 戸にもものぼる。この結果から米の農家の 1 戸当りの産出額が少ない事が理解できる。フィールドワークでも、米を作っても収益が少ないということを直接、農家の方から聞くことが多かった。

野菜に関しては、全国的にも突出した農産物は見当たらない。図 19 の通り、ばれいしょ（じゃがいも）を中心にバランス良く作っている印象である。勿論、野菜のブランド化に向けた動きもあり、村の立地を活かした高原で作る「自然薯」と「アスパラ」は村をあげて生産に力を入れている。平田村商工会では、自然薯を用いた商品を「ひらたブランド特

²⁴ 平成 20 年 平田村統計「平田村のすがた」より作成（参照日：2012 年 11 月 10 日）

産品」として既に売り始めている。また、「ひらた高原自然薯の里づくり実行委員会」も設立され、15名の会員で、年間1万本を生産し、毎年、11月には「阿武隈高原じねんじょ祭り」を実施している。高原で作るアスパラは、他のものより高値で取引がされており、作付け拡大を目指している。道の駅でも人気商品となり、アスパラのソフトクリームなど様々な加工品としても売られている。

食物以外では、「あぶくまローズ」も生産しており、高原の冷気を利用した色鮮やかなバラを生産している。大きさや色といった種類の豊富さだけでなく、日持ちする魅力ある生産物である。

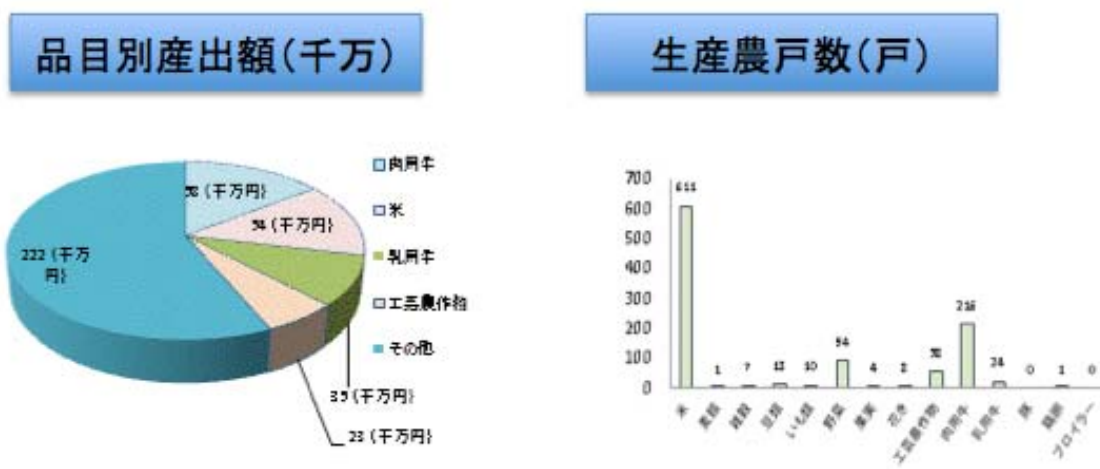


図 18：平田村農業別産出額、農家数 出典：平成 22 年 農林水産省 統計²⁵

■ 野菜		
	作付面積	収穫量
だいこん	7 ha	282 t
にんじん	1 ha	16 t
ばれいしょ	17 ha	265 t
さといも	2 ha	17 t
はくさい	8 ha	245 t
キャベツ	1 ha	29 t
ほうれんそう	1 ha	15 t
レタス	0 ha	2 t
ねぎ	5 ha	71 t
たまねぎ	0 ha	6 t
きゅうり	3 ha	71 t
なす	3 ha	34 t
トマト	2 ha	46 t
ピーマン	0 ha	4 t

図 19：平田村主要品目作付け量 出典：平成 22 年 農林水産省 統計²⁶

²⁵ 平成 22 年農林水産省 統計より抜粋（参照日：2012 年 11 月 10 日）

²⁶ 平成 22 年農林水産省 統計より抜粋（参照日：2012 年 11 月 10 日）

3 節 東日本大震災

1項 震災の概要

平成 23 (2011) 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、マグニチュード 9.0 の規模と推定され、東北地方を中心に最大震度 7 という強い揺れを生じさせたのみならず、巨大な津波を引き起こし、東北地方から関東地方の太平洋沿岸部に甚大な被害を与えた。放射性物質の漏出を止めるための対策がとられているものの、事態収束のめどは立っていない。

東日本大震災と阪神・淡路大震災

	東日本大震災(H23. 3. 11)	阪神・淡路大震災(H7. 1. 17)
地震	東北地方太平洋沖地震	兵庫県南部地震
地震タイプ	プレート境界型地震	内陸・都市直下型地震
震源地	三陸沖	淡路島北部沖
地震規模	M9.0 (観測史上最大)	M7.3
最大震度	7 (宮城北部)	7 (淡路島・兵庫県南東部)
主な被害要因	津波、強震	強震、火災
被害甚大地域	岩手県、宮城県、福島県の太平洋沿岸部	兵庫県南東部
死者	p15, 146 人	6, 434 人(6, 402 人)
行方不明者	p 8, 881 人	3 人(3 人)
住宅被害 ※損壊は全壊、半壊。 一部損壊の合計	損壊 p397, 087 棟 延焼 p 261 棟 浸水 p 9, 187 棟	損壊 639, 686 棟(538, 767 棟) 延焼 7, 574 棟(7, 534 棟)
非住宅被害	p26, 850 棟	42, 496 棟
避難者(ピーク)	45 万人以上(H23. 3. 14)	316, 678 人(1, 153 箇所)H7. 1. 23
ストック被害額	10~25 兆円	9 兆 9, 268 億円

図 20 : 東日本大震災による我が国経済への影響²⁷

日本人の比較的記憶の新しい大震災は、約 18 年前に発生した「阪神・淡路大震災」と一昨年の「東日本大震災」の 2 つであろう。この 2 つの震災の大きな特徴は、前者は被害要因が建物と倒壊とそれに伴う火災であるのに対し、後者は津波や原発の影響であり、被害規模が大きく異なる。

東日本大震災による経済への影響については大きく分けて 2 種類ある。まず、1 つ目は震災直後に被災地での生産活動が停止したことである。また被災地だけでなく全国的にも消費者マインドが低下することによる購買減少など一旦は経済活動が落ち込んだ。そして二つ目は被災地により、復旧・復興作業に伴う住宅・設備投資、公共インフラ整備といった復興特需が次第に機運を増してくるため経済活動は上向くというものである。

²⁷ 東日本大震災による我が国経済への影響 <http://www.sangiin.go.jp/> (参照日: 2012 年 12 月 22 日)

但し、今回の震災は「津波」、「供給制約」、「原発事故」などの複合的災害であり、このような態様を含め検討する必要がある。

今回の大震災は強い揺れと津波を伴い広範囲に巨額の被害が生じた。経済的な被害規模は約 16～25 兆円（うち民間企業設備約 9～16 兆円）と推計されている。²⁸

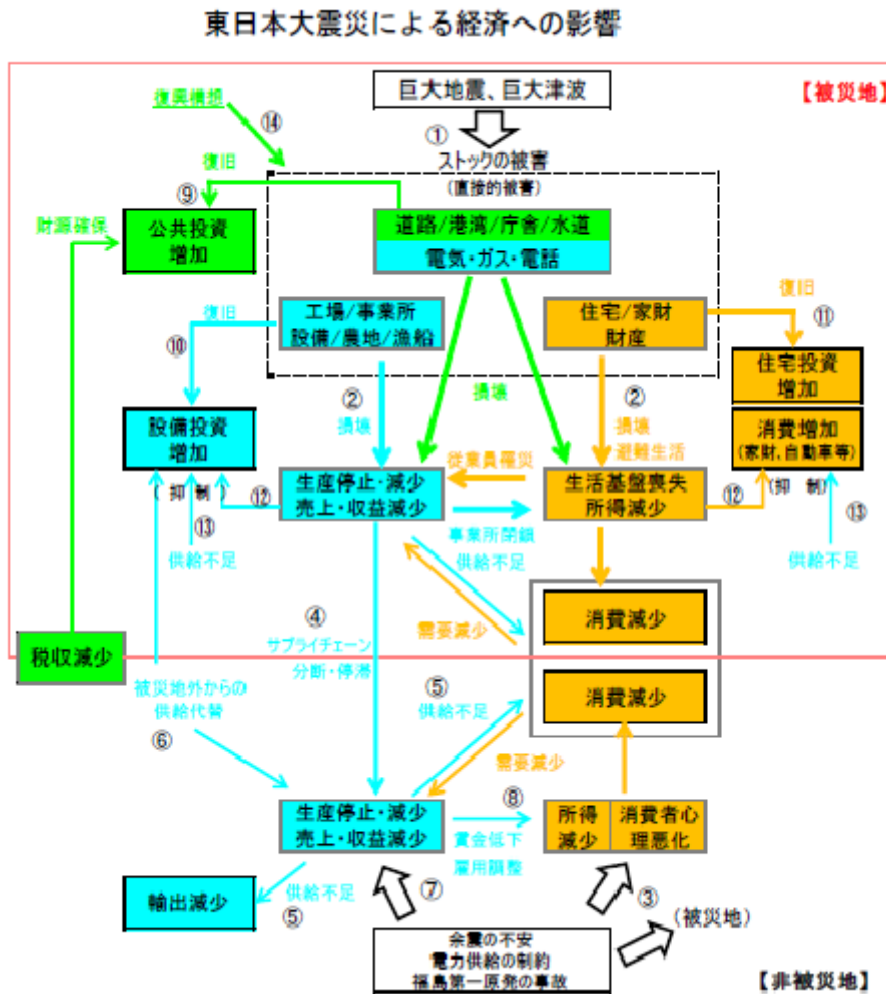


図 21：「東日本大震災による我が国経済への影響」²⁹

2 項 原発の影響

福島県は東日本大震災の福島第 1 原子力発電所の事故による影響が最も大きい。サプライチェーンの寸断・停滞及び電力供給不足が生じただけでなく、2 次的・間接的な被害を広げた点がある。

²⁸東日本大震災の復旧・復興経費 参議院予算委員会調査室資料

²⁹東日本大震災による我が国経済への影響 <http://www.sangiin.go.jp/> (参照日：2012 年 12 月 22 日)

放射性物質の漏出は、原発周辺の被災地の復旧・復興の妨げになるだけでなく、日本経済全体へも深刻な影響を与えかねない。今回の地震に伴う津波によって原発は重大な被害を受け、放射性物質が外部へ漏出する事態にまで発展した。放射性物質は、原子炉建屋の爆発・火災や原子炉格納容器のベントによって大気中に放出され、または高濃度の放射性物質に汚染された水の漏出や低濃度汚染水が海洋に放出され、放射性物質の汚染は広がっている。

この原発事故は被災地に対し、原発立地住民の避難などの影響で該当地域の復旧を遅らせた。さらにその地域の農産物及び海産物の出荷・摂取制限や「風評被害」などにより 1 次産業の比率の高い被災地の復興を妨げることになることが懸念される。また、被災地以外においても「風評被害」の影響を与えるほか、日本経済全体に対しても、「放射能不安」が消費者マインドを委縮させることにより消費を減退させる。震災から 2 年近くが経過したものの、未だに風評被害は収まらない。

ただ、私たちの大学のある多摩市「市役所」と福島県南東部に位置する平田村「村役場」の放射能線量を比較すると大差はない。数値的にみると前者は 0.06、後者は 0.09 と僅差である。図 22 は原発を中心とした放射能飛散マップ（2012 年 10 月 24 日現在の地上 1 メートルの線量）であり、線量を色の濃淡でも平田村は比較的少ないことがわかる。

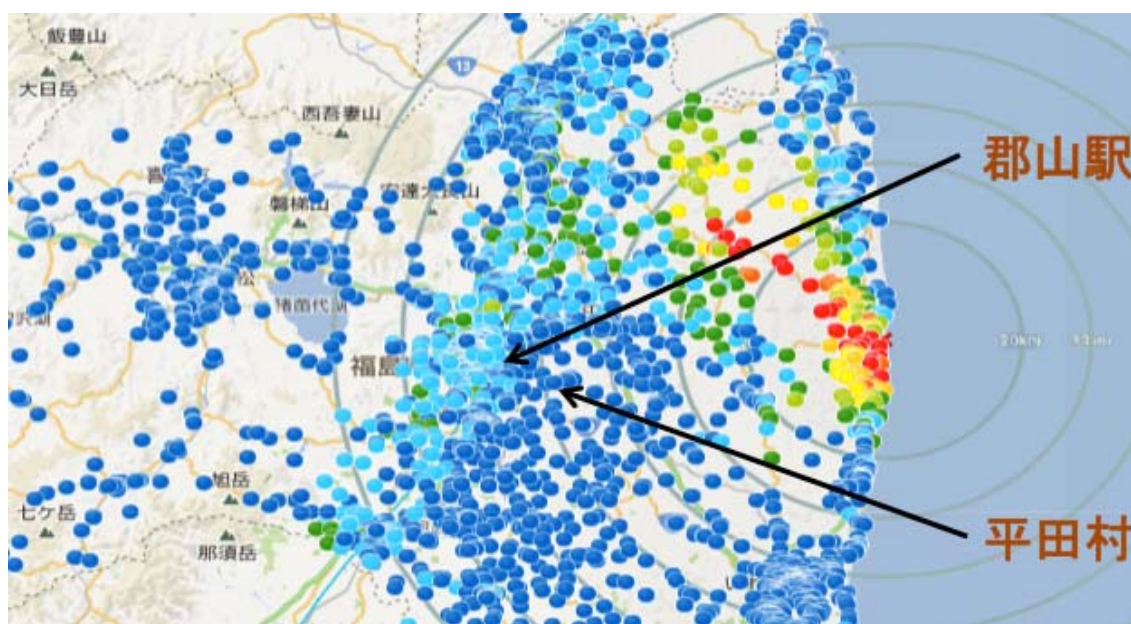


図 22：福島県の放射能飛散マップ³⁰

30 福島県放射能測定マップ <http://fukushima-radioactivity.jp/> (2012 年 11 月 30 日参照日)

第4章 事例研究

1節 道の駅

1項 概要と意義

「道の駅」は、1993年に103駅から出発し、現在では996駅と全国展開し、車社会を生きる国民にとって欠かせない身近な存在となっている。

今回の震災にあたっては、本来の休憩機能、情報発信機能、地域連携機能を土台に、震災直後には被災者支援の拠点となっただけでなく、自衛隊・消防などの基地、物資の集積配送拠点、市場の開催場所、など、復旧・復興支援の防災的拠点としても重要な役割を演じており、評価が高まっている。

その中でも、特に東北の「道の駅」は、震災直後に被災者救援の拠点となっただけでなく、自衛隊・消防などの基地、物資の集積配送場所、炊き出しや復興イベントの開催場所など復旧や復興支援の拠点としても機能したと言われている。「道の駅」が震災で果たした役割と今後の可能性を見つめること、「道の駅」を軸に、広域的な救援、復旧・復興プロセスを明らかにすることは、震災以後の日本の防災やまちづくりのあり方を考える上での大きなヒントになる。

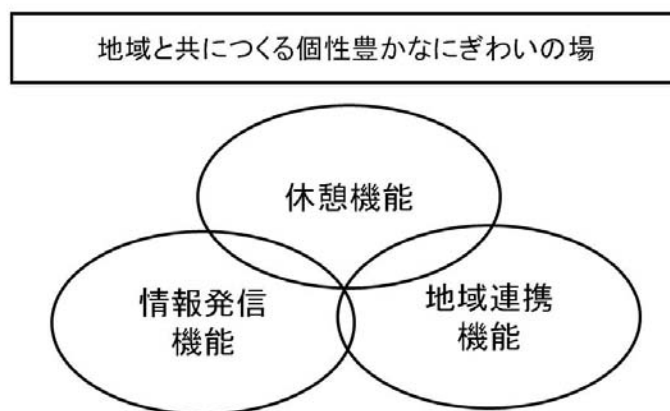


図23：道の駅の3つの機能

道の駅設置の背景として、長距離ドライブが増え、女性や高齢者のドライバーが増加するなかで、道路交通の円滑な「ながれ」を支えるため、一般道路にも安心して自由に立ち寄り、利用できる快適な休憩のための「たまり」空間が求められている。

また、人々の価値観の多様化により、個性的でおもしろい空間が望まれており、これら休憩施設では、沿道地域の文化、歴史、名所、特産物などの情報を活用し多様で個性豊かなサービスを提供することが可能だ。

さらに、これらの休憩施設が個性豊かなにぎわいのある空間となることにより、地域の核が形成され、活力ある地域づくりや道を介した地域連携が促進されるなどの効果も期待される。

こうしたことを背景として、道路利用者のための「休憩機能」、道路利用者や地域の方々のための「情報発信機能」、そして「道の駅」をきっかけに町と町とが手を結び活力ある地域づくりを共に行うための「地域の連携機能」、の3つの機能を併せ持つ休憩施設「道の駅」が誕生した。平成5（1993）年にスタートし、平成24（2012）年9月14日現在、全国に996箇所が登録している。また、東北には138の道の駅がある。

2項 道の駅「ひらた」の紹介³¹

道の駅「ひらた」は、阿武隈山系蓬田岳のふもと、国道49号とあぶくま高原自動車道「平田IC」のクロスポイントに位置し、道路を利用されるお客様のオアシスとして建設された。ここには、国土交通省による道路情報提供施設と、まちづくり交付金を活用した地域振興施設が整備され、平田村の玄関口としての役割が期待され、“ほっとポイント道の駅ひらた”として親しまれている。また直売所ではアスパラガス、いんげん、しいたけ、自然薯などをはじめとして、年間120種類の平田村の農産物や山の幸が並ぶ。鮮度は勿論、旬を大切にきたこだわりの栽培方法を持つ。農産加工品では、自然薯蒸しパン、ごぼうの蒲焼き、各種おこわ類、もち類、豆腐、無漂白こだわりうどん、各種スイーツ類などおやつにもおみやげにもぴったりの物産品を、手工芸品、木工品コーナーには手作りの小物類や工芸品を取り揃える。

平成21（2009）年6月12日に道の駅「ひらた」として登録された。ただ、村の知名度が低いことや、福島第1原子力発電所に近いことによる風評被害の影響や、アクセスが不便などの問題点も挙げられる。また、道の駅は国土交通省によると「地域と共に作る個性豊かなにぎわいの場」とあるが、道の駅「ひらた」では周辺地域のパンフレットがお手洗い施設内に設置されているだけでコミュニティスペースとして上手く活用が出来ていない。

2節 グリーンツーリズムを通じた地域振興

1項 福島県平田村「いきつけの田舎プロジェクト」³²

本プロジェクトの趣旨は東日本大震災、原発事故により深刻な被害を受け、1年を経過した今日でも風評被害に苦しみ、村外・県外からの来村者が震災前と比較して激減している本村に、村外・県外から体験型観光客を呼び込むことで、本村地域に対する理解、認識を深め、風評被害を払拭し、交流人口を増加させ、いわば“いきつけの田舎”を創生することで、地域振興に結びつけることである。

³¹ 道の駅「ひらた」紹介資料（2012年版）

³² いきつけの田舎紹介資料（2012年版）

本事業は、都会におけるいわゆる都会的生活を営む人々のみを対象にしているばかりではなく、今般の原発事故により避難を余儀なくされている人達にも広く呼びかけを行い、農業体験を通じた交流・支援を行うことも目的としている。

道の駅「ひらた」にとってこのような事業は初めてのため多摩大学との産学連携で、フィールドワークの場を提供し協働して事業の立案、評価、検証を行い、事業後の報告会を行う事で、次年度以降の事業継続を図ることとなっている。

参加者募集

“来らっしえ、ひらた！ えがおのふるさと”

Aコース	田んぼ体験のみ	5,000円 (3,000円/1畝×2畝)
Bコース	そば体験のみ	5,000円 (3,000円/1畝×3畝)
Cコース	田んぼ体験+マイ酒造り (醸造4升)	18,000円 (3,000円/1畝×2畝+10,000円)
Dコース	そば体験+そば粉5kg付き	18,000円 (3,000円/1畝×2畝+10,000円)
Eコース	フルセット	29,000円 (3,000円/1畝×3畝+20,000円)

※実施当日は「道の駅ひらた」集合になりますが、マイカー以外でお出での方は郡山駅まで送迎をいたします。集合場所及び郡山駅までの費用は各自負担となります。

“いきつけの田舎”創生事業実行委員会
 福島県石川郡平田村大字平田 田んぼ町100 道の駅ひらた内 電話 0247-55-6501

“いきつけの田舎”創生事業運営委員会ポスター（資料4）

このプロジェクトでは、平成24（2012）年6月3日の田植え体験を始めとし、8月3日～4日そば蒔き・そば打ち体験、野菜の収穫体験、9月30日そば打ち体験、10月13日～14日そば刈り、稲刈り、もちつき、12月そば祭りを行いました。福島県石川郡平田村の道の駅「ひらた」とその周辺のイベントで地域の方々を含め賑わっていた。



いきつけの田舎プロジェクト 10月14日イベント風景³³ (資料5)

2項 大分県安心院町 農泊

現在の日本が抱えている課題として人口減少と高齢化がある。この問題は平田村も例外ではない。これら課題を解決させてゆくため活動として、グリーンツーリズムが注目されている。今回、日本グリーンツーリズムの発祥の地である大分県宇佐市安心院(あじむ)の「農泊」の成功事例から、問題解決の糸口を検証する。

(ア) 安心院(あじむ)町とは

安心院町は大分県の北部に位置し、宇佐市にある町である。南の由布院、西の院内と「院」の名前の付いた地名の中心に位置している。気候は、1年間を通して、温暖な気候が続き過ごしやすい地域である。また、全国に先駆けてグリーンツーリズムを始め、未来型の観光を展望する町である。



図 24：安心院地区 出典：宇佐市観光協会³⁴

³³ いきつけの田舎創生事業 <http://www.ikitsukenoinaka.com/>(参照日：2012年12月22日)

(イ) グリーンツーリズムとは

農林水産省によれば、グリーンツーリズムとは「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」とされている。ヨーロッパでは既に普及しており、農村に滞在し、バカンスを過ごす文化として根付いている。日本では、自然派志向の家族の増加や、受け入れ側の民宿が自治体や農協や漁協などの協力を受けて普及し始めてきている。人気の背景には、図 25 のような、体験型農業体験（野菜の種まきや収穫など）のメニューの充実がある。今後の人気定着のカギは受け入れ側の充実で、高齢化が進む農村や山村では後継者育成が課題となるほか、地域の優れた景観の保護や特産物作りなどが欠かせない。

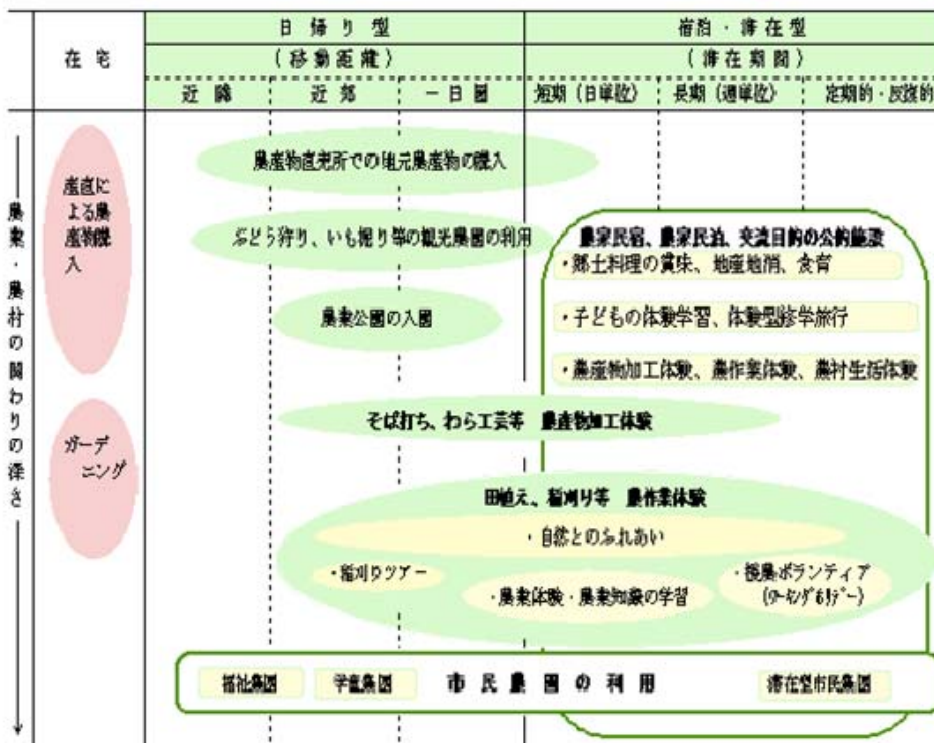


図 25：グリーンツーリズム事例 出典：農林水産省³⁵

(ウ) 安心院グリーンツーリズム

安心院はぶどうを主体とした農業の盛んな場所であったが、作物の価格切り下げによって収入が減少した。そうした中、平成 4 (1992) 年からグリーンツーリズムに着目し、農家を補う産業として期待が高まり、平成 8 (1996) 年に「安心院町グリーンツーリズム研究会」が設立された。そして、今度 5 年間を見据えた活動計画を決め、毎年「安心院町の再発見」、

³⁴ 大分県宇佐市観光協会資料 <http://www.usa-kanko.jp/> (参照日：2012年11月10日)

³⁵ 農林水産省 グリーンツーリズム事例 (参照日：2012年11月10日)

「グリーンツーリズムの具体的な手法の検討」、「モデル的な農村民泊の開始」、「対外的なアピールの実施」などの活動を経て、5年目には「町全体のグリーンツーリズム」を始動した。

安心院のグリーンツーリズムには独自の特徴があり、「安心院方式」とも呼ばれ、「会員制農村民泊」を実施している。「会員制農村民泊」とは、ごく普通の民家の空いた部屋に宿泊し、農村の生活そのものを体験できるシステムである。新たな改築を必要としないため、経済的に無理がない。農家の生活や家をそのまま活かし、無理をせず楽しみながら行うことを基本としている。この何気ないもてなしが感動を生み、宿泊者を増やしている。その結果、町が活性化しただけでなく、1次産業と3次産業の融合で、農家の収益が増加している。

(エ) グリーンツーリズムが与えた波及効果

安心院のグリーンツーリズムは、先にも述べた町の活性化と、農家の収益増加は意図した成果と、意図せざる効果があった。それは、「村のコミュニティの形成」である。安心院がグリーンツーリズムを進めていく中で、研究会が発足し、外部の成功事例を研究するだけでなく、自分の住む町の強みや弱みに関する知識を深めていった。また、グリーンツーリズムを始めるために、数多くのプロジェクトが発足し、町民自らコミュニティを創出していったのである。その結果、地域住民自らが集落の実状を把握し、集落のあるべき将来像を描き実現していくといった“村づくり”としての効果があったのである。

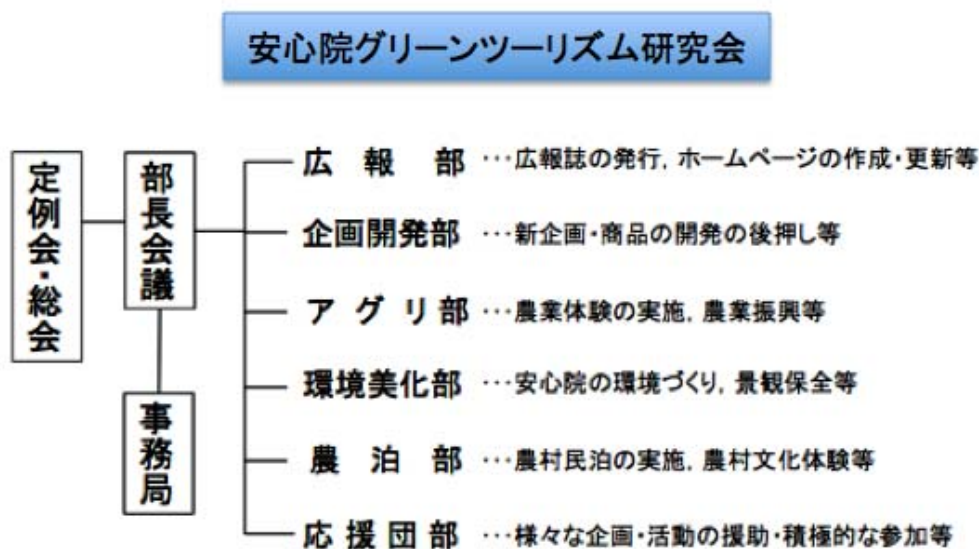


図 26：グリーンツーリズム研究会組織図

出典：安心院町のグリーンツーリズム活動にみる村づくりの経緯とその成立条件³⁶

³⁶ 安心院町のグリーンツーリズム活動にみる村づくりの経緯とその成立条件

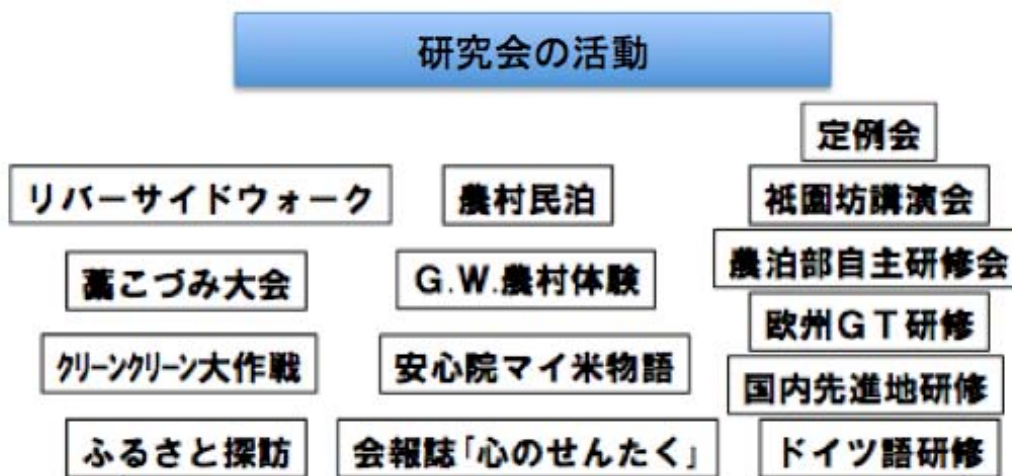


図 27：平田村グリーンツーリズム 研究会の活動事例

出典：安心院町のグリーンツーリズム活動にみる村づくりの経緯とその成立条件

3 節 コミュニティ形成を通じた健康長寿 山梨県桐原地区

山梨県桐原地区は、山梨県北都留郡小菅村及び上野原市周辺の山村集落を指す。平成 17（2005）年の国勢調査による都道府県別完全生命表（平均寿命）、及び同年 10 月時点の介護保険制度の要介護認定者数を基に、山梨県の健康寿命が算出されている。その結果、男性は、65 歳で 16.38 年と 2 位、70 歳から 85 歳では全国で 1 位である。女性は、65 歳で 18.59 年と全国で 1 位、70 歳と 75 歳で 1 位、80 歳と 95 歳では 2 位である。³⁷

³⁷ 山梨県の健康寿命について <http://www.pref.yamanashi.jp/>（参照日：2012 年 12 月 22 日）

男

	65歳		70歳		75歳		80歳		85歳	
1	長野	16.40	山梨	12.61	山梨	9.22	山梨	6.25	山梨	3.91
2	山梨	16.38	長野	12.45	沖縄	8.99	沖縄	6.00	沖縄	3.77
3	福井	16.17	沖縄	12.33	長野	8.92	茨城	5.96	茨城	3.68
4	静岡	16.07	福井	12.27	静岡	8.86	静岡	5.94	千葉	3.61
5	沖縄	16.05	静岡	12.24	茨城	8.82	福井	5.84	静岡	3.60
6	千葉	15.97	千葉	12.14	福井	8.81	長野	5.84	福井	3.58
7	宮崎	15.95	宮崎	12.13	千葉	8.73	千葉	5.84	埼玉	3.54
8	熊本	15.93	茨城	12.11	東京	8.71	高知	5.79	高知	3.50
9	茨城	15.88	東京	12.09	宮崎	8.68	埼玉	5.78	石川	3.48
10	香川	15.86	香川	12.05	香川	8.64	東京	5.77	宮崎	3.47
	全国	15.58	全国	11.80	全国	8.42	全国	5.54	全国	3.27

女

	65歳		70歳		75歳		80歳		85歳	
1	山梨	18.59	山梨	14.22	山梨	10.13	茨城	6.53	茨城	3.84
2	茨城	18.43	茨城	14.12	茨城	10.08	山梨	6.51	山梨	3.73
3	福井	18.29	福井	13.88	静岡	9.81	静岡	6.23	静岡	3.50
4	長野	18.26	静岡	13.88	福井	9.80	福井	6.17	埼玉	3.46
5	静岡	18.25	長野	13.83	長野	9.70	栃木	6.10	千葉	3.44
6	新潟	18.23	新潟	13.81	新潟	9.66	長野	6.09	福井	3.44
7	滋賀	18.02	福島	13.65	福島	9.62	福島	6.06	福島	3.44
8	福島	18.00	滋賀	13.63	栃木	9.59	滋賀	6.03	栃木	3.44
9	高知	17.94	栃木	13.60	滋賀	9.56	高知	6.00	滋賀	3.41
10	栃木	17.94	高知	13.58	高知	9.54	新潟	5.99	長野	3.37
	全国	17.30	全国	12.95	全国	8.93	全国	5.51	全国	3.03

図 28：健康寿命（「要支援・要介護」総数による）

山梨県はあまり知られていないことだが、健康寿命日本一だ。「健康寿命³⁸⁾とは、自立して生活でき、介護がいない寿命のことで、例えば90歳で亡くなる5年前から介護を必要としている場合、健康寿命は85歳ということになる。

この健康寿命と密接に関わっていると注目されているのが、山梨県に広がる「無尽」という寄り合い・コミュニティのような人と人とのつながりである。無尽とは、同窓会や地区の旅行会、テニス、飲み会などの多種多様なサークルのような集まりのことで、山梨大学の調査では3つ以上無尽に参加している人は、全くしていない人の2.4倍も健康寿命が長いことがわかる。「週刊ポスト」³⁹⁾によると、長寿のキーワードは次の3つが挙げられている。それらは「食事」「運動」「生き甲斐」である。

日本人は今、飽食と偏食の中で心身ともに退化し始めている。しかしこの桐原村の「食事」は、とても健康的である。「食と邑おこし-桐原探訪-」によると健康・栄養バランスを

³⁸⁾ 健康長寿日本一 <http://www.ybs.jp/>（参照日：2012年12月22日）

³⁹⁾ 健康長寿村特集 「週刊ポスト 小学館」（参照日：2012年10月12日）

第一に考えた昔ながらの食生活を非常に大切にし、お年寄りを中心に非常に健康的な食生活を送っている。

一例として、麦や雑穀米を中心とした素食メニューを提供している、ふるさと長寿館の最も手頃な「古希」というメニューの料理を紹介する。料理構成は主食にきび飯、そして、かけそば、せいだのたまじ、イモガラ、山菜天ぷら、山芋、刺身こんにやく、野菜の煮物、鮎の塩焼き、酒まんじゅうなどである。この写真は最も豪華な白寿という料理⁴⁰である。



桐原食事例（資料6）

だが近年、文化の発展により若者を中心とし現代食に慣れ、80・90歳代の親よりも、50・60歳代の子どもが生活習慣病になり、親よりも先に亡くなってしまう「逆さ仏」が起きる事態に発展しており改善が迫られている。その原因は、昔の生活に比べ、粗食・旅行などの活動を捨てたことである。

さらには、3つ以上の無尽に参加している人の中でも、「楽しい」無尽に参加している人は、「つまらない」無尽に参加している人の4~6倍も健康寿命が長くなる。生きがいの調査では、趣味や仕事を生きがいに行っている人は健康寿命が長く、お金を生きがいに行っている人は健康寿命が短いという結果があり、具体的な目的意識が高く元気でいたい人は、健康寿命が長く、ただ長生きしたい人の健康寿命は短いということである。つまり、地域における交流が盛んであること、地域の行事への参加が大切である。

山梨県と長寿の関係については、古くから注目・研究されていた。厳しい生活環境であるにもかかわらず、住民は腰も曲がらず、寝たきりになることもなく、夫婦ともに長寿を全うしている。生活の中には健康長寿のヒントが多く隠されている。健康長寿を生み出す山梨の風土は、まさに「宝の山」である。

⁴⁰ 食と邑おこし 長寿の里 桐原探訪(文芸社・山口好昭) p.43

4節 花を通じた地域活性化 大分くじゅう花公園

平田村ジュピアランドの芝桜祭りには毎年約 70,000 人の来場者がある。今後のジュピアランドの発展に役立つ成功事例を紹介する。

平成 5 (1993) 年に開園し、10 年後には年間入場者数 60 万人を記録したが、平成 19 (2007) 年には 39 万人に減少し、財務状況の悪化を招く。その後、平成 21 (2009) 年から施設の社員有志を中心に新会社を設立し、運営にあたっている。運営内容もチューリップの掘り取り、ラベンダーの摘み取り、ブルーベリーの摘み取りやミニ音楽会など体験イベントを増やし、自然食品のテナントを誘致するなど、自然とのふれあいと来場者とのコミュニケーションを重視し運営されている。平成 20 (2008) 年にスポンサーによる園内の整備が進み、花の生育状況はよく、ラベンダーなどは最盛期の美しさを取り戻した。この地域に自生するミヤマキリシマ、アジサイなども楽しめる。豊かな自然はアサギマダラ、蝶、野鳥なども楽しめる。

1 項 ビジョン

くじゅう花公園は、「花を通して自然など調和をはかるという想いを花公園という形にし、久住の自然を守り、花を植え続ける」を目指している。

2 項 立地

大分県阿蘇くじゅう国立公園内久住高原（標高 850 メーター）に位置する。敷地は 20 万平方メートルあり、年間を通し営業されており、花の見どころは春から秋までである。近郊には黒川温泉（車で 25 分）や観光名所（湯布院、足を延ばせば阿蘇山）に恵まれ、来場者数増に貢献している。



図 29：大分県くじゅう花公園の位置と概要



図 30 : くじゅう花公園所在地と近隣

3 項 花公園の運営と特長

くじゅう花公園のスタッフは女性を中心に構成され、ブログも運営されている。花の開花情報も重要で、お目当ての花の開花予想がリアルタイムで提供されている。花の種類は 500 種類、年間を通して 300 万本が花をつける。

平成 24 (2012) 年の開花予想⁴¹を見ると春から秋には屋外の花、12 月～3 月までは室内で鑑賞できるように温室も備えている。資料 7 は Google 画像サイトからダウンロードしたものであるが、主要な花では、左からポピー、しば桜、チューリップ、ひまわり、ラベンダー、コスモスなどが植えられている。また、高地に適しているブルーベリーの栽培もおこなわれている。

⁴¹ くじゅう花公園ホームページ「開花予想」(参照日：2013 年 1 月 17 日)
<http://www.hanakoen.com/hanakoen/index.php#kaika>

		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
春	ビオラ		■	■	■								
	チューリップ		■	■									
	シバザクラ		■	■									
	ネモフィラ			■	■	■							
	リビングストーンデュー			■	■	■							
	ポピー			■	■	■							
	春彩の畑		■	■	■	■							
夏	ラベンダー				■	■	■						
	ケイトウ					■	■	■					
	ハナビシソウ				■	■	■						
	ひまわり						■	■					
秋	サルビア							■	■	■			
	コスモス								■	■	■		
	アゲラタム								■	■	■		
	冬の寄せ植え									■	■	■	
温室・アンティル		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
カントリーガーデン		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

図 31 : くじゅう花公園開花予想



くじゅう花公園所有の画像より抜粋 (資料 7)



公園内には子供からシニアまで一日楽しく過ごせるよう13のショップやレストランなどがあり、車いすやシニアカートの貸し出しもある。また、ペットの入園できる公園にもなっている

くじゅう花公園のサービス1 (資料8)



くじゅう花公園のサービス2 (レストラン系列は6店舗) (資料9)

出典：くじゅう花公園ホームページ

くじゅう花公園は阿蘇山国立公園内に位置しており、観光客の往来が激しい地区にあるため集客の課題としては、通りすぎてしまう公園とならないため、女性をターゲットに女性による緻密なサービスが提供されており、老若男女が楽しめる公園となっている。

ジュピアランドは同じ高原であるという点では花の種類と植え方など土壌や花を維持するためのノウハウの学びのほかに、高齢者に優しい公園はこれからの高齢化社会に必要な配慮であると考えられる。

第5章 事例の提案

本章では「協働の村づくり」を実現させるために村のコミュニティ形成を通じた2つの事例を提案する。

1 節 農泊体験を通じたコミュニティ形成

田舎に行って農家に泊まるという一般的なアイデアを平田村の立地・環境・道の駅の相乗効果を出すために、ノウハウを組み込んだ村のコミュニティ再生と村民間のコミュニケーションの活性化を農泊プランを通して提案する。

これはグリーンツーリズムを通して平田村を活性化させようとする『いきつけの田舎プロジェクト』の未来型である。

1項 平田村の立地・環境的価値

平田村は郡山市といわき市を結ぶ国道49号線の間地点にあり、あぶくま高原道へのアクセスともなる平田IC近くに道の駅ひらたが位置する。標高500-700mの立地と、郡山を経て49号線から平田村に入る高原を見渡せる田舎の現風景に都会からの来訪者が平田に魅せられる由縁でもある。道の駅ひらたでは、高原でとれた季節の野菜（きゅうり、アスパラ、自然薯、そばが認知度が高い）の販売のほか、レストランでは石川牛の牛丼やそばなど「素朴でうまい」を食べることができ、都会人を魅了してやまない。

2項 SOHO⁴²の仕組みを使った農泊プラン

コミュニティ形成を通して村を活性化させるにあたり、「SOHO」の活用を提案する。SOHOとは、Small Office Home Office（スモールオフィス・ホームオフィス）の略であり、小さな事務所や自宅を、情報通信ネットワークを駆使して仕事場にしたり、事業を起こしたりすることである。休憩、情報発信、地域連携の3つの機能を持つ道の駅ひらたは、SOHOの場づくりに最適である。具体的には、道に駅ひらたのコミュニティスペースを活用し、村の活性化を行うコミュニティの拠点とする。本項では、平田村の農泊を実行するプランをSOHOを通してPDCA（Plan, Do Check, Action）の順に説明する。

Plan 共同化：農泊のための組織作り（思いを共有する）

- ◇ 平田村の価値を意識している村民による会を始める。「道の駅ひらた」の駅長の参加は不可欠。（コミュニケーションの場を提供）
- ◇ 村の価値（農村の現風景や生産物・生活習慣）を共有し同じ価値観を持つ。
- ◇ 村民協働に作り上げられるリーダーの選出。
- ◇ 村の活性化のために「農泊プロジェクト」を立ち上げる。
 - ー必要な人材： 平田村の価値への想いのある人（リーダー）。
リーダーシップを発揮できる尊敬されている人（例：医師ら）。
平田村の活性を望み行動に移したい人数名。
農泊・村づくりスペシャリスト（外部アドバイザー1名）。
 - ー農泊の定義・目標・目的を決めて共有する。
 - ー農泊プログラムの標準化（内容の標準化）をはかり、実施する農家間での差を最小限に抑える。上記を図式化し、わかりやすく可能なプログラムにする。

⁴² SOHOとはsmall office, home officeを省略した一般的な呼び方をSOHOという、以降SOHO)



図 32 : 共同化

Do 表出化 : SOHO 農泊プランを村と共有（コミュニケーション）し予算化する。

- ◇ 道の駅と村のリーダーの協力を得るための意見交換会を行う。
- ◇ 道の駅をコミュニケーションスペースとして位置付ける。
- ◇ 想いを共有できる場所、場を作る。
- ◇ 村のプロジェクトとして村会議へ提案。
- ◇ 第三セクター道の駅「ひらた」との協力基盤を確立する。
- ◇ 村民全体へのプログラムの告知と承認。
- ◇ 活性化へのステップとしての共感を得る。
- ◇ “農泊 SOHO” プロジェクトを村のプロジェクトとする。（予算化）



図 33 : 表出化

Check 連結化 : “農泊 SOHO” 情報の共有を徹底する（道の駅の運用）

- ◇ 具体化に向けて定期的に集会を開く（道の駅のコミュニケーションスペースの活用を促進）。
- ◇ 農泊農家の募集（はじめは 2，3 家庭でも OK）。
- ◇ 年間スケジュール、具体的プラン作り（農泊の内容を決める）、サポート要員の募

集など。

- ◇ 村のイベント(芝桜まつり、駒形ジャンガラ念仏踊り、サマーイルミネーションなどの季節プログラム)と協力して、農泊プラン作りを行う
- ◇ 情報の発信(村内及び村外)の重要性を共有し、“東京ひらた”への情報提供と農泊募集に協力を依頼する。



図 34 : 連結化

Action 実行 (内面化) : “農泊 SOHO” の実施と結果の共有

- ◇ 農泊を実施した家族との意見交換と次回に向けての課題を共有する。
- ◇ 村民へ結果を伝える場を作る (道の駅 : コミュニケーションの場の形成)。
- ◇ 農泊提供者による経験の共有 (When, Where/何時、何処では SOHO が決定する)。
- ◇ “農泊” のメリット・デメリットを共有し、村の値打ち (価値) を再認識する機会を提供できる。(協働の結果が出る)
- ◇ 村民コミュニケーションが増え、道の駅への立ち寄りが増える。
- ◇ SOHO によるコミュニティの形成と村民による価値の共有が起こる。
- ◇ 新しい“農泊”の形が出来ることで、あたらな SOHO の可能性を引き出す。



図 35 : 内面化

3 項 道の駅「ひらた」のコミュニケーションの場としての活用

私たちは仙台近郊の道の駅や福島県道の駅ひらたを訪問し、その役割を確認することができた。すなわちその地域にすむ住民の情報交換の場であり、これからは防災、医療の拠点としてもその役割が有用視されてくるであろう。それらの役割の中から、道の駅ひらたの担うべきものを、コミュニケーションスペース（情報交換の場）として位置付けたい。

（ア）コミュニケーションスペース（情報交換の場）

「道の駅 ひらた」にはいわゆるほっとできるスペースがある。それはトイレである。長時間のドライブの休憩時に、昼食で立ち寄った時に、ほっとできる個室（トイレ）は何よりの場所である。隣の情報センターは休憩所として開放運営されているが、村民が気兼ねなく集まって話ができる場としての役割を担ってもらいたい。まず、農泊 SOHO のコミュニティが利用することで、道の駅は目的のある情報交換の場となり、その結果として集客、活性（客の増加、購買）を促進する。現在のレストランの運営に加えて、情報センターをカフェ方式にすることも居心地の良いスペースへと変化させることができる。

（イ）野菜と花の道の駅への展開

5 章 2 節で「花を通した復興と地域振興」との連携で、それぞれのプロジェクトにかかわる村民の協働を生み出す可能性を示唆したい。大分くじゅう花公園の成功に倣い、女性の活躍できる場に変化させることを提案したい。具体的には、野菜を販売する道の駅で花を販売することをプラスし、道の駅の付加価値をあげる。

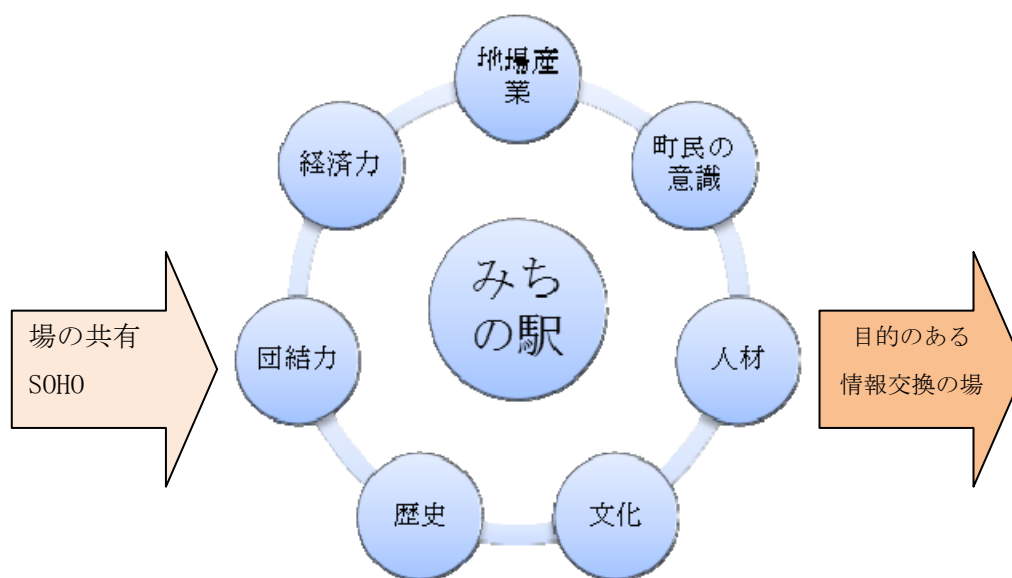


図 36：道の駅の役割と可能性

これらの事例提案には平田村でリーダーシップを取る人の存在が不可欠であり、予算化も重要である。現在の道の駅の平成 23 (2011) 年 9 月～平成 24 (2012) 年 3 月の決算報告書⁴³では収支は赤字に近い。販売管理費が非常に高く反映されているので、第 3 セクターとしての経営はこれからである。村の予算を注入してスタートしているため、赤字を出さないように、人の流入をうまく活用するプランを立て継続することが非常に重要である。農泊と花とのコラボレーションで女性と若者が楽しく働ける場を創造することは遠くない将来に可能であると思われる。

4 項 ” 農泊体験 “ の具体例

福島県石川郡平田村「いきつけの田舎」モデルツアー(バスを利用の場合)

トータルコストは 2 泊 3 日で約 27,800 円

1 日目

08 時 30 分 東京発

平田に近い SA にて昼食休憩 (銚子せんべい 2 枚配布、お茶 1 本)

14 時 30 分 平田着

14 時 30 分 道の駅「ひらた」見学

15 時 15 分 稲刈り体験 (25 分 : 稲刈り、20 分 : 稲を前に塩むすび 1 個試食)

16 時 30 分 ジュピアランドひらた (子供たちと自然との触れ合い体験)

17 時 30 分 (カエル、栗、サンショウウオ、カニ、登山など)

18 時 00 分 分泊所へ 夕食 (A5 級肉使用 BBQ、餅つき、地酒堪能)

2 日目

10 時 00 分 酒蔵見学、my 酒作り体験

11 時 30 分 そば打ち体験@道の駅平田 と昼食

14 時 00 分 村上家でライスセンター見学

15 時 30 分 ～ 「都会から行ってみたいくなる農泊プラン作り」の
フリーディスカッション (甘酒や和菓子試食を含む)

17 時～ 農泊提供家族と地元食材を使った夕食作り

20 時 30 分 星空と宇宙を語る (夏 : 樹里庵にて)

3 日目

10 時 00 分 野菜の収穫体験 (収穫した野菜はクロネコで発送)

11 時 00 分 会津方面へ観光

19 時～20 時頃 東京着

⁴³ 平成 23 年度平田村出資法人の経営状況報告書

<http://www.vill.hirata.fukushima.jp/sonsei/data/23mitinoeki-houkokusyo.pdf> (参照日 : 2012 年 11 月 10 日)

第2節「花」による平田村活性化

平田村の強みは、畜産、農業、自然、農村の風景などあるが、その中でも私たちは、「花」に着目する。平田村には花に関する2つの強みがある。1つは「ジュピアランドひらた」である。そして、もう1つが「あぶくまローズ」である。ジュピアランドひらたは、蓬田岳のふもとにある自然公園であるが、そこでは、毎年5月に「芝桜まつり」が開催される。県内外を問わず観光客が集まり、平田村最大の観光行事となっている。あぶくまローズは、あぶくま高原の冷涼な気候を活かして作られたバラであり、高冷地で作られているので、色鮮やかで日持ちが良い。そのため、夏場には他の生産地よりも高値で取引されている。

震災前から平田村活性化にとって重要な資源であったが、震災後、より重要なものとなっていくと考えられる。花は口に入れるものではないため、「原発事故による風評被害」を大変受けにくいという性質をもっているのである。震災後も花の卸し市場で、福島県産の花の価格が他の産地と区別されていない事がその良い根拠となっている。そのため、今後の見通しの立たない福島第1原子力発電所の状況と、風評被害を受ける中で、平田村が希望を持って生活し続けるための提案を「花」を通して行う。

その際、下記の4項目に分けて、平田村活性化を考え、最後に、「花の町・平田」の全体図を描き出す事とする。

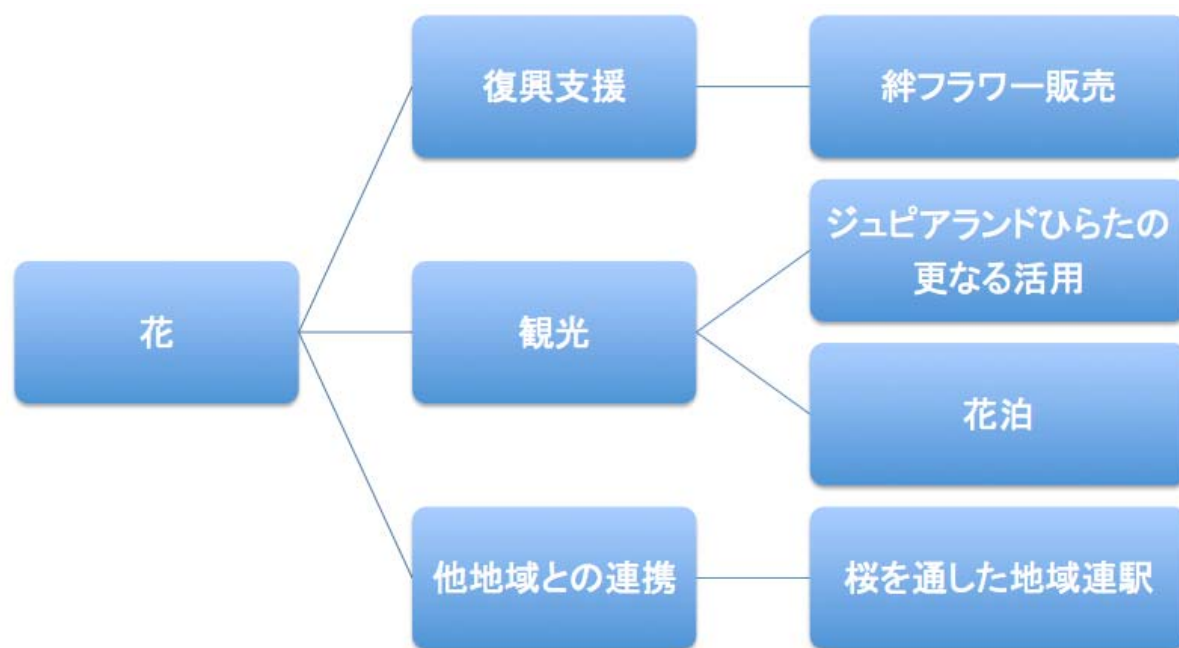


図 37 : 「花」による平田村活性化案

1項 花を用いた被災地支援プロジェクト「絆フラワー」

まずは、平田村で実現が容易な事から提案を始める。その案が「絆フラワー」を販売する花を用いた被災地支援プロジェクトである。

震災後、津波で荒廃した土地に花を植える事業や被災地に花を贈る事業は様々な団体によって実施された。とりわけ注目を浴びたのが、ひまわりを植えるプロジェクトであった。丸の内朝大学をきっかけに生まれた「ひまわりプロジェクト」は元気を連想させる花、ひまわりを復興のシンボルと位置づけ、関東などで市民が育てた苗を被災地に贈って被災者自身が育てていくというものである。ひまわりの成長の喜びを味わうだけでなく、図 38 のように、被災者の絆、被災地と支援者を繋ぐ絆として一役買った。



図 38：ひまわりプロジェクト概要⁴⁴

また、「花」は復興や絆をイメージさせるものでもあり、NHK の復興支援ソングも「花は咲く」という「花」のフレーズが使用され、平成 24 (2012) 年の紅白歌合戦でも歌われた。

この復興のシンボルを、平田村のための支援プロジェクトとしたい。具体的な内容は、平田村で作られた「あぶくまローズ」をブーケにした「絆フラワー」をインターネットで販売する。そして、そこであげた収益を平田村の農業支援や、新規事業創出に活用する。

⁴⁴ ひまわりプロジェクト 丸の内 (参照日：2012年11月10日)

この事業は一過性の資金援助による支援だけでなく、2つの繋がりを作る糸口とする。まず1つが被災地と購入者の繋がりである。出荷する際に、生産者が感謝の思いと個人の名前を書いた手書きのメッセージカードを同封する。そして、次回購入する際に返事を書いていただくスペースを注文書やホームページに用意する。返事をいただいた場合は、いただいた方が再度返事と花を送る。被災地や平田村という大きな支援先では、支援者側も一体誰の役に立っているのか分かりにくい。そのため、平田村の特定の個人と繋がりを作り、実感できる絆を作りたい。また、被災地の支援は一過性のものとなるケースが大変多い。そのため、個人通しのコミュニケーションを通して、新規支援者との関係を築き、継続して支援いただき、長期的に平田村に関心を持っていただくことになると考えられる。

もう1つは、購入者同士の繋がりである。購入者を平田村公式サポーターとして認定し、サポーターを限定したサイトを作成する。そこで、平田村からの情報発信や村の活性化のための、アイデアを支援者同士が共有できる仕組みを作っていく。この場を通して、平田村住民と一緒に、「絆フラワー」のプロジェクトで集った支援金の利用方法を考えていただくなど、発展性のコミュニティとして機能させたい。

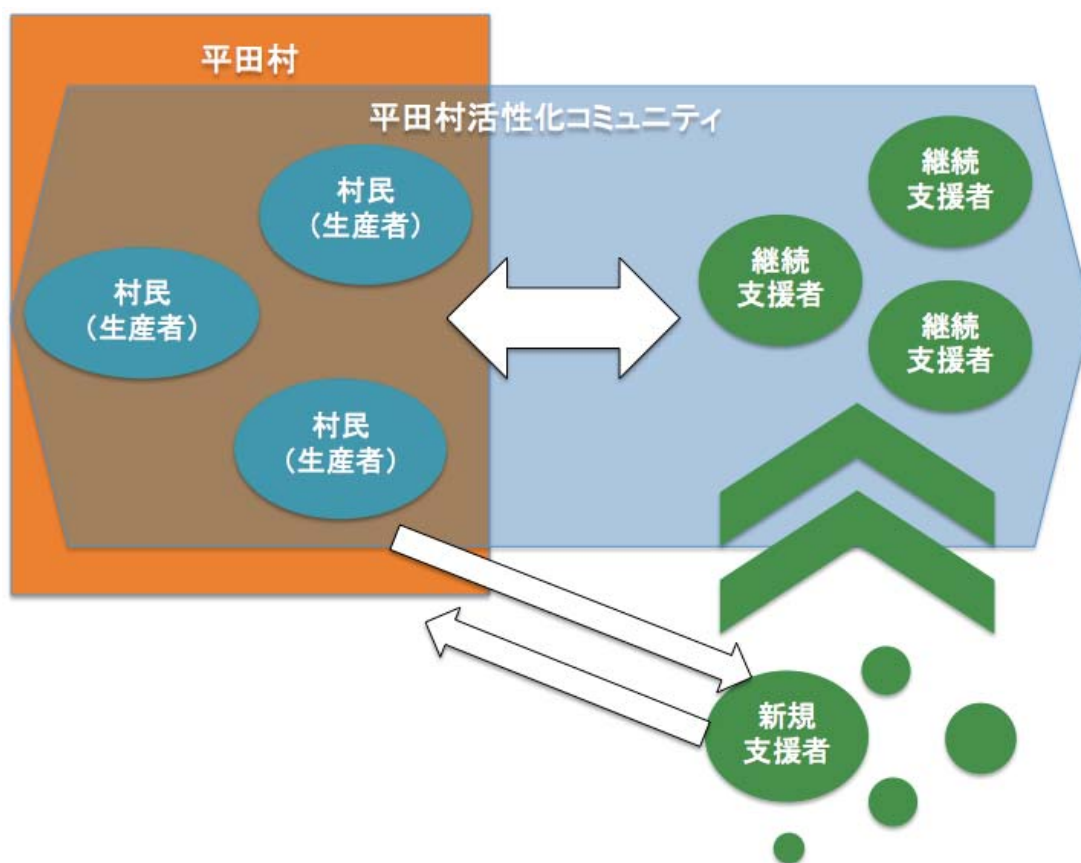


図 39 : 絆フラワー事業

2 項 平田村型グリーンツーリズム「花泊」

先程、紹介した「農泊プラン」を活用させたアイデアであるが、平田村独自の体験型宿泊プランとして、「花泊」を提案する。花泊とは、農泊同様、花卉生産農家を宿泊地としてそのまま活用し、昼間には花の生産体験や、花摘みを行う。また、摘んだ花を通してアレンジメントや、工芸品を作成してお土産として持って帰っていただくオプションを用意する。

より具体的に紹介すると、大人にとっては、農泊同様、自然や人々との交流を楽しめる他、花泊には、より「癒し」の効果を体感いただけるプログラムにすることができる。図40のように花の香りには様々な効果があり、バラやカーネーションには、「鎮静（心を落ち着かせる）」の効果がある。そのため、花と過ごす中で綺麗な見た目だけでなく、常に香りを感じていただく。具体的な案としては、地元住民主体で、アロマのワークショップや、香水作りなども開催可能である。また、農泊先の湯船に花びらを散りばめて、アロマバスとすれば、農泊先の魅力も増し、温泉宿のない平田村の新たな目玉にもすることもできる。

花の香りの効果



バラ
＜鎮静効果、安眠効果＞



キク
＜菌力や強壮効果、
精神のコントロール＞



カーネーション
＜瞑想的な気分を誘う効果＞



サクラ
＜気分を高揚させ、
不安や落ち込みを緩和＞

図 40：花の香り 効用一覧 出典：わかさ生活研究所⁴⁵

農業や花に興味のある大人だけではなく、花は子供の教育にも一役買う事ができる。幼児や児童が成長期において、花や緑と触れ合う事で、優しさや美しさを感じる情操面の向上が期待されているのである。実際に、農林水産省では、花卉を通して教育を「花育」として定め、推奨している。具体的には、花卉業界や地方自治体の関係者と連携を図り、「花育」を全国的に広めていくための「全国花育活動推進協議会」を平成 20（2008）年 3 月 28 日に発足させ、教育機関やイベントでのワークショップや講演会を実施している。平田村でも、子供と大人が一緒になってできるプランを作り、家族客を呼び込む活動も可能である。

⁴⁵ わかさ生活研究所香り研究室 <http://kaori.wakasa.jp/fragrance/effect/>（参照日：2013 年 1 月 17 日）

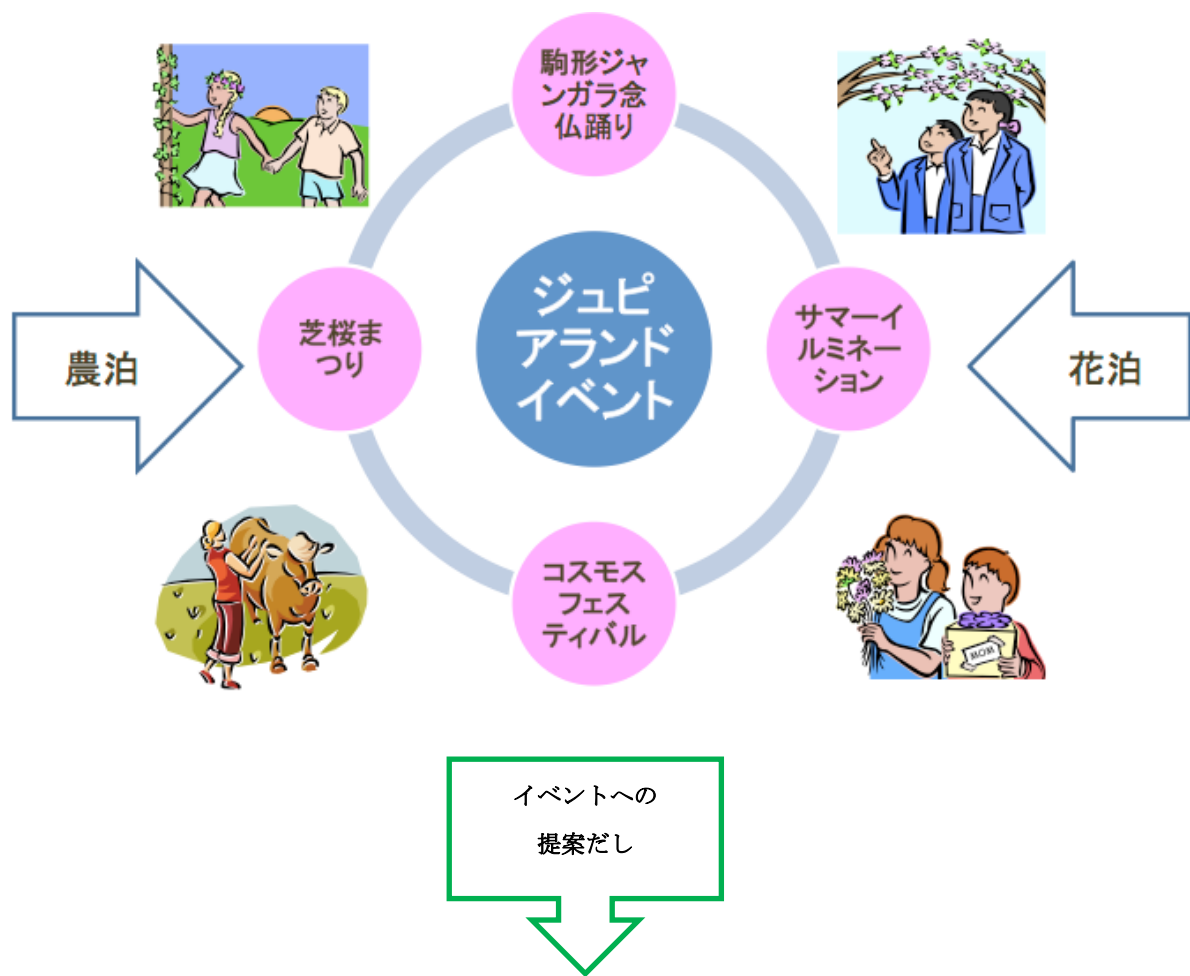


図 41 : 花泊プラン

3 項 「ジュピアランドひらた」の活用

「ジュピアランドひらた」では毎年 4 月末から 5 月中旬まで 12 万余株の芝桜が豪華絢爛に花を咲かせ、村の一大イベント「芝桜まつり」として村外から多くの観光客を呼び込むイベントになっている。加えて夏には駒形ジャンガラ念仏踊りや、サマーイルミネーションと季節に応じたプログラムが平田村では準備されている。

また、花を軸にしたさらなる活用については、夏のアジサイ、秋のコスモスと企画準備が進んでいる。我々からの提案として、それぞれのイベントに農泊や花泊を組み込み田舎の空気を吸い、心と体に癒しの 2 泊旅を提案する。



「都会から行ってみたい田舎作り」

図 42：ジュピアランドひらたの活用

具体例：都会から行ってみたい田舎作り

主体：農泊 SOHO と花泊 SOHO の若者らが軸になって企画する。

対象：都会の 20 代後半から 30 代の男性と女性向けのプラン。

目的：都会の若者らが田舎とふれあい、平田村の良さを体感してもらい、村民と村の活性化にむけて、協働で行う。花を中心としたイベントは参加型になりやすく、受容型(見る、いただく)となりやすい。また、年齢層が高くなりがちのため、ジュピアランドのイベントを活用し、若い人を中心としたプロジェクトを作り上げることは、重要であると認識している。

1 日目 村が主催するイベントへの参加。

2 日目 新たなイベントへの提案ミーティングで「都会から行ってみたい田舎作り」についてディスカッションをする時間をとる。

4項 フェイスブックの活用

どんなプロジェクトも発信することで理解を得て広がりを見せるので、ソーシャルネットワークの活用は有効である。東京を中心とした関東圏での認知度を高めるため、平田村SOHOでフェイスブック上に、「芝桜の村ひらた」を立ち上げることを提案する。

フェイスブック上に「芝桜の村ひらた」を立ち上げ、「芝桜の村ひらた」イベント発信局とする。年間を通してジュピアランドの四季を紹介する。都会の若者に平田村をもっと知ってもらおう。季節毎のイベントを紹介する一方、放射能汚染が非常に少ないことをPRする。道の駅「ひらた」のイベントをPRする。農泊（心と体を癒す一泊旅）を紹介、募集などに運用する。道の駅 季節の特産品のPRも行う。

5項 桜を通した多摩との連携

花を通して、他の地域との連携も考える事ができる。花を町の活性化として活用している地域は多くあり、各々の地域が連携し合うことで、ナレッジを共有できるばかりか、共に事業を展開することも可能である。また、地域間の連携は、交流人口の増加に繋がり、それ自体が町の活性化にも繋がる。

本項では、広域な構想ではなく、とりわけ多摩市との繋がりを中心提案することとする。多摩丘陵は文化文政の時代に 350 本の桜が植えられ「桜馬場」が創られてから桜の名所として知られた場所であった。そして、現在の市の花は「ヤマザクラ」が指定され、まちづくりのために「桜」を活用している地域である。多摩商工会議所では、活力と魅力あるまちづくりのために「多摩桜プロジェクト」を実施している。このプロジェクトは10年後・20年後の多摩市を見据えてより競争優位性の高い都市魅力と活力を創造するため、「桜」と「桜文化」を基にしたビジョンに示し、「花」「文化」「環境」のまち多摩市として持続可能で長期戦略的なプロジェクトを立ち上げるものである。

このプロジェクトの中でも平田村と関係性を築いていける可能性のある2つの活動を紹介する。1つが「桜ネットワークと桜データベース」である。これらは、多摩市域全域を対象に「桜」「桜文化」と「桜人(さくらびと)」についての再発見調査を実施している。(全国で熱心に桜の植樹や保存の活動をする人を「桜人」と呼ぶ。) 地域に埋もれている桜の古木や名木の発見と再評価、市民が愛する桜の木や場所の認定、そして桜をこよなく愛し、桜の植樹や保存に一生懸命な人々や桜文化を愛でる市民の発掘とネットワーク化などを積極的に推進する活動である。現時点では、多摩市内での活動であるが、桜を強みとしている平田村と連携していくことを提案したい。桜を通した人と人との繋がりによって、まだ気付いていない桜の価値を再発見する機会にもなる。お互いの桜に関する知識(データベース)が増加する。さらに、桜人ネットワークを通して、お互いの町を行き来することになれば、交流人口も増え、お互いのまちにメリットが生じる。

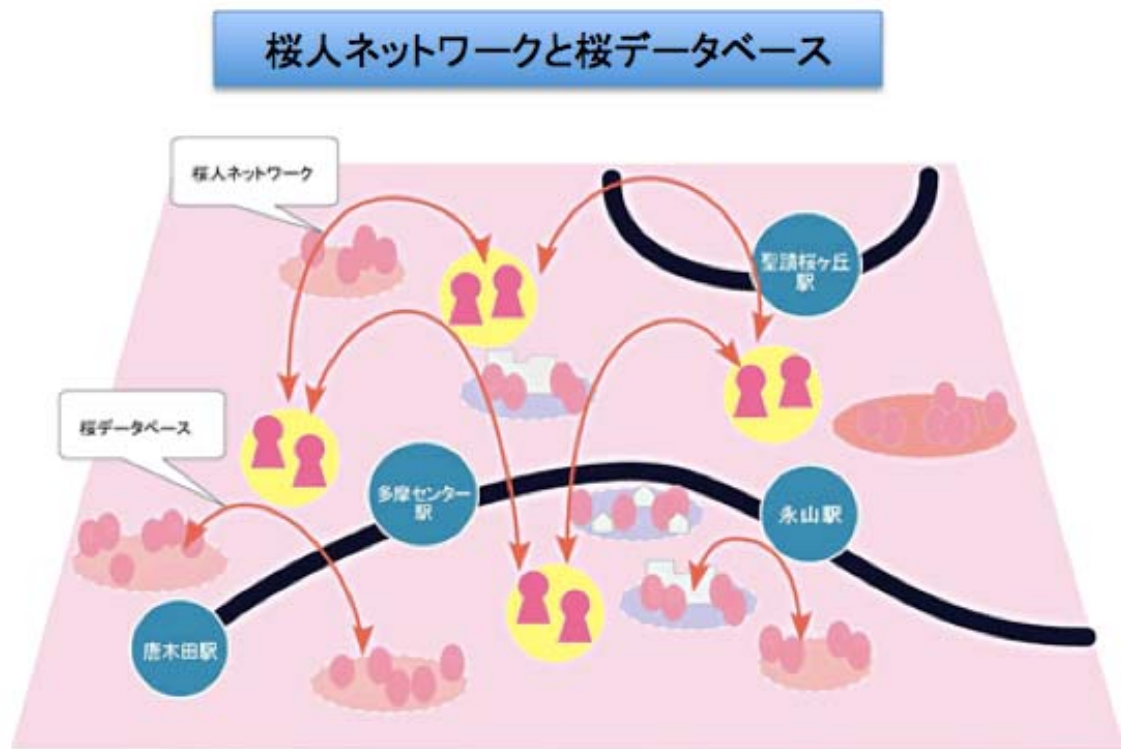


図 43：桜人ネットワークと桜データベース 出典：多摩市商工会議所⁴⁶

他にも「花・はな・華 TAMA 倶楽部」は、平田村への SOHO の活用と類似した活動がある。コミュニティと集まるための場を用意し、そこを拠点として、参加者が自発的に活動内容を決め、実践していく仕組みである。既に、桜を主体としたシンポジウムが開催されている。そのため、まずは平田村が多摩市に学び、その後、共通でシンポジウムを開催したり、共同プロジェクトを発足したりすることが可能となる。また、コミュニティ形成を通じた、地域活性化という目的を共有しているため、コミュニティの運用方法に関しても互いに議論を交わしていく意義がある。

⁴⁶ 多摩市商工会議所桜プロジェクト http://www.tamacci.or.jp/sakura_project/project/project.html (参照日：2013年1月17日)



図 44：花・はな・華 TAMA 倶楽部 出典：多摩市商工会議所

多摩商工会議所にも、多摩大学と平田村との繋がりも形成可能である。現在、多摩大学は多摩市役所主導の「多摩市手土産プロジェクト」を多摩商工会議所と地元企業と連携をとって進めている。そして、手土産にするにあたって、多摩市の桜を用いたものを創ろうと模索している。平田村も「芝桜まつり」や道の駅で販売するための、桜を用いたお土産は必要であり、共同でアイデアを描いたり、互いのまちの販売所で売ったりすることもできる。

多摩大学の地域活性化に関する授業におけるフィールドワークの対象として、長期的に付き合っていくことも互いにメリットがある。

6 項 SOHO の活用

これまで、花を用いた4つのアイデアをあげたが、平田村の活性化に向けて、これらの提案をどのように実現させていくかということが非常に重要となる。そこで、私たちが提案したいのは、5章でもとりあげた「SOHO」を通したコミュニティ形成である。アイデアを出すだけでは何も変わらない。平田村の外部から人やお金を一時的に投入し、短期的な変化を起こしても、またすぐに元に戻る可能性が非常に高い。そのため、平田村の人々が主体的に出したアイデアを実施できるコミュニティ。さらには、アイデアを自ら応用したり、新たな構想を生み出したりするコミュニティ形成が必要となる。

おわりに

地域・震災班では、村の皆様の想いを形にかえるお手伝いができればと、様々な機会を通してコミュニケーションを図りながら、本研究を進めて参りました。また、これまでの調査研究から農業を基盤とした村の活性化のみでは限界があると判断せざるを得ない状況であることも認識しました。そこで平田村の現在の立ち位置、村の年間イベントや道の駅などの資源と特性を生かしたアイデアを先行事例として参考にしながら、新たな提案として作り上げました。具体的には、村民自らの手でコミュニケーションの場を形成し、目標を共有するSOHOをスタートさせ、「協働の村づくり」につなげる手法を“農泊”と“花泊”の2つの事例で紹介しました。このような形ではあるが、SOHOを活用したコミュニティ形成が平田村活性化への一助となることを切望します。

謝辞

本研究の全過程を通じて、研究の指針、考え方、的確なアドバイスをいただいた寺島実郎学長、様々な資料を提供いただき、根気良く懇切なるご指導をいただいた久恒啓一教授、長田貴仁教授、平田村を知るきっかけを与えていただいた松本祐一准教授に心より感謝の意を表します。

私たち学生のために、貴重な時間を割いていただいた福島県平田村の道の駅「ひらた」高野哲也駅長、村上信一様、宗像博幸様、大木信之様を始めお世話になった皆様、平田村役場 澤村和明村長 産業課 芳賀年一様、吉田光一様、佐藤治学様そして、インターゼミ生をサポートしていただいた学長室の高野智さん、山本紀子さんに感謝の意を表します。

最後に、自らも忙しい中、我々に学びの機会を与えてくれた両親、家族、そして、論文を書く力を与えてくれた学友に感謝いたします。

所感

私は昨年度よりこのゼミで震災班の一員として活動してきた。昨年度は水産業という視点から、そして今年度は農業という視点から研究した。昨年度は秋学期からの参加であり主体的に活動できなかったが今年は違った。0から研究し、チームの方向性を決め、それがズレないように修正しつつ前に進んでいく大変さを痛感した。当初は「道の駅」の研究を深めることや、親日的な台湾にその技術を輸出するなど突拍子もないことを考えついたりもしたが何とか無事に論文を完成でき、一安心した。東北の「道の駅」訪問、3回に及ぶ福島県平田村へのフィールドワークを通し、ただ単に机上の研究し論文を提出することよりも、この研究を通し平田村に感謝されるように、ともに村を活性化させていきたいという想いが強まった。

今後は私たち地域・震災班だけでなく、「いきつけの田舎プロジェクト」に関わった多くの多摩大学生や多摩市在住の方と平田村を盛り上げていく方向性が固まった。

(梅田裕介)

平田村に何度か足を運ぶことで、実際に様々な人から現場の「声」を聞くことができた。澤村村長の村の人々に対する願い、道の駅ひらたの高野駅長や村上理事長の活性化への模索や村民の平田村に対する想いを知ることができた。

福島県だからと懸念されている事実もあるが、私たちは大学生だからこそ、そのような風評被害にとらわれることなく、自身の目線で平田村の魅力などを村民に気付いてもらい、村外の人に知ってもらう必要があると考える。

また村民だけでなく、福島県全域、大きくは日本全国に「福島県石川郡平田村」を知ってもらえるような村づくりができると、多くの人々が平田村の魅力に気づいてもらえと思う。

そして、平田村の魅力を知ってもらうためには情報を外に流せる環境が必要になると考える。道の駅は道路に結ばれた環境の上に存在する。県内外から多くの人々が行き来するという意味では、今後も道の駅の重要性がより大きくなるのではないかと思う。

(古西政樹)

この度、インターゼミで学ぶことが多くあった。それは今回の研究テーマにとどまらず、大学生と高校生の違いに始まり、論文に関して多くの人々の協力があつたからこそ完成できた。そのため、戸惑うことが多く、チームの一員として役割を果たすことの重圧に何度も挫けそうになりましたが、完成させることができ、大変嬉しく思います。この研究論文をきっかけに既存の「道の駅」の機能だけでなく、新たな価値を創造していく一役を担っていければ幸いである。

(角野匡子)

インターゼミ【地域・震災班】に参加できたことは、多くの学びにつながりました。まず大学院だけでは得られない素晴らしい体験でした。フィールドワークはチームメイトとしての絆を強くする意味でも重要でした。また、私にとってこの10カ月は、若い方々との協働をいかに成すかというテーマでもありました。宮城と福島に行く機会に恵まれ、目の前にある被災者の仮設住宅や津波によるがれきの山の横で運動する子供たち。声をかけることなどできない中で、迫ってくるものがあり胸が苦しくなりました。風評被害に苦しむ方々との対話、マスコミが取り上げる汚染の情報は心が痛みました。忘れてはならないという想いが強くなっていく毎日でした。福島県平田村の方々との出会いは田舎という故郷のない私には幼いころに祖母や母に連れられて歩いた田舎の道とあたたかい想いに心が満たされ、そのような経験を都会人が味わうことが出来ればという想いに変わっていきました。毎週アドバイザー先生方には進捗の悪いチームにサポートをいただきながらも、右往左往、本当に論文が書けるのだろうかと思ったこともありましたが、何とか論文の形を成すことができましたのはやはり、チームメンバーが最後まであきらめず頑張ったからだと思っています。また平田村の関係者の皆さまの熱意にこたえようとする皆の想いの成果だと思っています。平田村に行った時の感動は今でも消えていません。2013年芝桜まつりには是非行ってみたいと思っています。

(川合紀子)

本稿を書くにあたって、「地域」をテーマにする事の難しさを何度となく味わってきました。やる事は、研究対象を調べ、課題を解決したり、更に改善したりするための仮説を立てて、実現性を検証する事であり、至ってシンプルである。ただ、地域・震災班は、福島県平田村という具体的な地域を研究対象とした事で、地域に住む方々と出会い、ほんの一部だけではあるが想いを感じた。そこから、「責任」と「価値観の違い」という事を強く感じるようになった。

特に我々を苦しめたのが、「責任」である。我々は論文を書くという事であるならば、自由にアイデアを出し、突拍子もない事でもその可能性があるのであれば、論文に書き込む事ができた。地域振興や震災復興のためのアイデアはいくらでもある。メディアでもよく取り上げられる題材であるし、参考資料も豊富に揃っている。そのため、アイデアを多く書き込み、それぞれを検証してゆくアイデアノート型の論文執筆は決して難しくなかったのではないかと思う。ただ、我々は平田村の方々から直接多くの情報をいただき、想いを垣間見てきた。そのため、好き勝手やって、村を掻き乱すような論文は書きたくなかった。また、勿論、平田村に住む程、地域に入り込み、書いた内容を主体的に実現させていく覚悟もなかったため、書いて終わりになる論文も書きたくはなかった。そのため、とにかく多くのアイデアが出ては消えという繰り返しであった。

また、「価値観の違い」にも苦労した。平田村の状況は、「人口減少、高齢化」と「風評

被害」と傷が深く、個人としては、大きなシフトチェンジがないと村の存続は大変厳しいだろうという考えでいた。ただ、平田村に住む方々は、何年も何世代にも渡って、平田村という土地を守って来た方々である。平田村に対する、我々と住民の価値観は違って当たり前である。そのため、住民の方々に対して、地域の持つ「価値観」を壊すようなアイデアは出せないし、無視する事も出来ない。そのため、大きなシフトチェンジの必要性と実現可能性との板挟みの状態であった。

我々は、今回の論文を通して、地域やそこに住む人を相手に研究し、アウトプットを出す事の、難しさと、「畏（おそ）れ」を知った。言葉の意味から考えると、決してポジティブなものではないだろう。しかし、真剣に向き合うとは、どのようなものか身をもって感じる事ができたのは間違いない。これは、自分がこれから出会う課題を乗り越えていくために避けては通れない壁であり、この1年、自らの成長において素晴らしい経験をさせていただいたと感じている。

(武田一斎)

社会工学研究会（インターゼミ）地域・震災班
◆第1回フィールドワーク 宮城県道の駅探索◆

★調査概要

日時：2012年7月7日（土）～ 8日（日）

参加者：多摩大学 経営情報学部 梅田裕介、古西政樹、角野匡子
多摩大学 経営情報学科大学院 武田一齋、川合紀子

場所：宮城県内 6 箇所の道の駅

- 1, 道の駅「林林館」 宮城県登米市東和町米川字六反 33-1
- 2, 道の駅「上品の郷」 宮城県石巻市小船越字二子北下 1-1
- 3, 道の駅「あ・ら・伊達な道の駅」 宮城県大崎市岩出山池月字下宮道下 4-1
- 4, 道の駅「三本木」 宮城県大崎市三本木字大豆坂 63-13
- 5, 道の駅「津山」 宮城県登米市津山町横山字細屋 26-1
- 6, 道の駅「路田里はなやま」 宮城県栗原市花山字本沢北ノ前 112-1

★調査目的

- 1, 過疎でかつ被災地域の活性化の論文作成にあたり、現状を正確に把握する。
- 2, 過疎地域中の特性や問題点を肌で感じ体感する。
- 3, 現地の生の声を聞き、意見交換を図る。
- 4, 活性化に向けての具現化した事例を深く探る。
- 5, 震災対応の実態と新しい役割のシンポジウムに参加。
- 6, 現地視察、インタビューを通じ、問題点の把握、研究活動としてのスキル向上を図る。
- 7, グループ行動を通じ、責任を持った役割分担、効率的な計画での相互研鑽を図る。

●
★行程

7月7日

- 09時24分 東京駅集合。やまびこ 207号に乗車し、仙台へ移動。
- 11時17分 仙台駅到着。レンタカーを借り宮城県内「道の駅」フィールドワークへ向かう。
- 14時10分 道の駅「林林館」の駅長に取材。
- 15時50分 米川カトリック視察。
- 16時40分 道の駅「津山」視察。

18時30分 道の駅「上品の郷」視察。

20時30分 仙台駅到着。

7月8日

08時00分被災地「七ヶ浜町」を視察。

10時30分道の駅「あ・ら・伊達な道の駅」の駅長に取材。

14時00分道の駅「はなやま」視察。

15時40分道の駅「三本木」視察。

17時30分仙台駅到着。

18時48分仙台駅発

20時56分東京駅着

★交通手段、手配

1, 対応旅行代理店 京王観光永山営業所 担当：上原様

2, 手配ツアー名 近畿日本ツーリスト ザ・ビジネス限定列車宿泊付プラン E0Z4003

3, 仙台駅～道の駅周遊 レンタカー使用 8人乗りトヨタ Noah ニココロカー-仙台宮町店
～道の駅「林林館」～



道の駅「林林館」森の茶屋と取材風景

Q1、震災時の状況を詳しく教えてください。

林林館の直接的な被害は少なく、酒瓶が3本割れた程度で建物へ大きな被害はなかった。インフラ被害では、トイレなどの下水道の機能の停止と停電だけで、上水道とガスは稼働した。上水道と下水道で影響が異なった理由として、上水道の貯水タンクは山側に設置されており、山から降ろす形となって林林館に流れているので、被害がなかった。一方で、下水道は海側に設置されており、海側のパイプは寸断されてしまったため、機能しなくなった。国道が、仙台・石巻と気仙沼などの主要地同士を結んでいるため、震災後から多く

の人々が来店し、多いときには、1日で1500人の人々が林林館を訪れた。その影響で、震災以降、利用者の多さから、国道が防災道路として見直されつつある。

トイレが使えないため、辺りは糞尿で大変な事態となったが、道の駅職員が毎朝、清掃を行った。トイレも使えないため、封鎖したが、意味がなかった。

Q2、震災以前の利用状況を教えてください。

通常時は隣接する、ふるさと食堂を地元の人たちに無料で貸し出し、手芸教室などを行う。利用者の割合は県外からが約80パーセント、県内からが約20パーセントとなっている。また、目の前の道は気仙沼と仙台・石巻を結ぶ主要道になっているため、トラックドライバーの利用者が多く、リピーターも多い。当道の駅のシステムとして、個人の売り上げの15%を道の駅に残りの85%が自分の利益となる。

Q3、道の駅の名称由来は何ですか？

「林林館」という名前は、公募の結果、町民から50候補程度挙がり、「緑の多さ・林の多さ」から「林林」という名前が付いた。ちなみに名付け親は、現在の駅長の息子さんである。

Q4、震災直後、多くの取材依頼はありましたか？

東日本大震災により林林館も例外ではなく、大学、サークル、個人の卒業論文としてなど様々な分野から取材があった。震災から1年が経過し、ようやく落ち着いてきた。

～道の駅「あ・ら・伊達な道の駅」～



「あ・ら・伊達な道の駅」の正面玄関

Q1、道の駅はどのような目的で立ち上げましたか？

市場の競争経済からの回復と躍進の願いをこめて立ち上げた。

Q2、道の駅の役割とは何ですか？

道路利用者などへの休憩施設の提供、大崎市及び街道市町村や各種団体などへの情報発信、農作物中心で地域振興と物産品のアンテナショップ展開をすることである。

Q3、道の駅の強みとは何ですか？

国道 457 号、47 号、10 号の 3 路線が近接しており交通量が多く、そのためゴールデンウィーク中は広大な駐車場も満車になってしまうほど混雑する。1 日に複数回、農作物の仕入れを行い鮮度（品質）にこだわった直売所創りをしている。また、北海道のロイズチョコレートを使用したプレミア感溢れるアイスクリームを提供し、1000 個以上販売することも少なくないほどである。このソフトクリーム装置はイタリア製

Q4、運営の課題は何ですか？

駐車場やアクセス性が良いため来店客は非常に多いが売り場スペースがさほど広くなく、そのスペースの確保、拡大が課題となっている。

Q5、震災時の対応と課題は何ですか？

震災時は、建物を含め被害は少なかった。国道が3本近接しているが意外にも支援の車の交通は少なかった。震災時の課題は、この道の駅に限らず、お手洗いが使えない、インフラや燃料の確保など道の駅に共通した問題が発生した。

大規模な道の駅だからこそ、IT技術の導入が功を奏していた。駅長が現駅長に変わってから売り上げが伸び、収益が伸びたことも注目すべき点である。運営の3つの柱（高品質な直売所、ロイズのチョコレート、ソフトクリーム）が整備されているからこそ、安定しているのである。

◆第2回フィールドワーク◆

日程：8月3日（金）～8月4日（土）

場所：道の駅ひらた ジュピアランドひらた他（福島県石川郡平田村）

参加者：梅田裕介・古西政樹

郡山駅で古西政樹・梅田裕介と前年度の道の駅調査に同行した千葉光樹さんも合流した。郡山駅にて宗像博幸さんの送迎で道の駅ひらたを経由し、ジュピアランドひらたへ向かった。ジュピアランドを見学した後に、樹里庵へ移動した。そこで松本祐一准教授が合流し、樹里庵前の広場にてバーベキュー歓迎会を開催していただいた。その際に樹里庵の内部を見学させていただいた。1階部分には囲炉裏などが設置されていた。

2階部分には、昔に使われていた道具が保存されていた。私たちは実際に使ったことがないものが多く保存されていた。また、夜になると、周囲に外灯がなく、真っ暗だが夜空に広がる星は感動するきれいだった。「道の駅ひらた」高野哲也駅長に星がきれいですね、と話したところ、「そんなにきれいですか。普通ですけどね」という回答が来た。都心で暮らす私たちは、このようなきれいな星は見る機会がなく、この夜空も活性化のために使えるのではないだろうかと考えた。

バーベキュー終了後は樹里庵内部の囲炉裏を囲んで、インタビューや歓談を行った。話のメインは主に原発事故と東日本大震災後についてで、予算の使い道などについて話を聞いた。

翌日は10時に道の駅ひらたに集まり、その後村上信一さんの運転でそばまきを行うための畑へ移動した。長靴に履き替え畑に入り、そばまきを実地体験し、耕運機の体験運転などもさせていただいた。そばをまいた後は、実際にとれたそばを使用し、そば打ちを行った。完成したそばは、普段食べているようなそばとは違い、新鮮さを感じることができた。



樹里庵の全景（資料10）

◆第3回フィールドワーク◆

日程：10月13日（土）～10月14日（日）

場所：道の駅ひらた ジュピアランドひらた他（福島県石川郡平田村）

参加者：梅田裕介・古西政樹・武田一斎

13時に道の駅ひらたに到着し、多摩大学松本祐一准教授と酒井麻衣子准教授、学生の千葉光樹さん・日吉蔵人さん・高橋由賀利さん・鈴木孝之さんと多摩市から参加の浜田健史さん親子と合流し、そば畑へ移動した。8月に植えたそばが2か月ほどきれいに実っていた。平田村の関係者に管理をしていただいたそばだが、自分たちが植えたそばがきちんと実をつけて育っていたことに喜びを感じた。その喜びを感じつつ、手刈りによるそば刈り体験を行ったすべてを手刈りするのは非常に大変なことなので、ある程度行った後は、機械による刈取りを見学した。そば刈り終了後は自動車にて平田村内を見学した。村の南端に位置する芝山の展望台からは平田村や近隣の市町村を一望することができた。

翌日は朝に理事長の村上さんの稲畑へ移動し、稲刈り体験を行った。稲は数本の束になっており、鎌で刈るには苦勞したが、コツをつかむことでスムーズに刈り取ることができた。昔は、近隣の住民と共に協力しながら、大人数による手作業で刈取りや脱穀などを行っていたが、今では、ほぼすべてが自動化されている。自動化されることで人の手が少なくて済み、近隣住民の協力を必要とすることなくできるので、住民同士の交流も減っているのではないかと感じた。稲刈り終了後は村上信一理事長が運営するライスセンターの見学を行った。実際にライスセンターに収穫された米が搬入される様子も見学することができた。搬入する人は高齢者が多く、自分で軽トラックに乗せていることを聞いた。

次に平田村の放射能検査場を見学した。収穫された米袋には生産者の情報がわかるバーコードが張られており、袋の外部から放射線量調べるというもの。規定値以下の物には、検査済みシールが張られる。その後、ジュピアランドひらたに移動し、新米を使用して餅つきを行った。出来上がった餅はよくのび、多少残ったお米の感じが手作りの感じを醸し出していた。



稲刈りの様子（資料11）



参加者の皆さんと平田村の人々（資料12）

第4回フィールドワーク

日程：12月23日（日）

場所：道の駅ひらた 若清水酒造株式会社他（福島県石川郡平田村）

参加者：古西政樹

多摩大学の松本祐一准教授と酒井麻衣子准教授と共に、宿泊場所である真弓の湯太田旅館から道の駅ひらたへ移動し、学生の千葉光樹さん・鈴木孝之さんと多摩市在住の浜田健史さんと合流し、村上信一理事長の運転で若清水酒造株式会社へ移動した。酒造の専務から若清水酒造についての紹介などの話を聞いた後、酒絞りの体験を行った。ノズルをひねると、お酒が出るので布袋にお酒を入れ、平田村村長の澤村和明さんと出会い、自己紹介などを交え、平田村の構想などの意見交換を行う。短い時間ではあったが、今後の平田村活性化において重要なキーワードなどを聞き出すことに成功したのではないかと考えている。

平田村村長の澤村和明さんは、元行政書士でビジネス経験者であり、過去にはかばん持ちなども経験している。

福島のフェスタにて、平田村はリンドウを出店した。その結果、あっという間に完売した。理由は、他の市町村のリンドウに比べて、色合いが全く異なってきたことが大きかった。

毎年綺麗に咲く芝桜だが、冬に雪の下に眠らせることによって、色合いや桜の強さが全く異なることがわかったので、人工雪とジュピアランドひらた内の傾斜を利用して、雪面すべりなどが行える雪まつりを開催している。人工雪を降らせた初年度は、芝桜の調査だったために雪まつりは開催しなかったが、翌年からは開催した。今の平田村の子供たちは雪を知らないため、雪遊びも知らない。そのため良い機会になっている。

ジュピアランドひらたは現在、春には芝桜まつり、冬には雪まつりを行っているが、夏と秋には行事がない。そこで、現在一部の村役場職員に声をかけて密かに、アジサイの全種類の収集を目指している。アジサイは全部で約860種類あるとされている。平田村では現在30種類ほど収集した。目標は、3年以内に全種類を収集することで、その後、夏にアジサイ祭りを開催する。ジュピアランドひらたは現在、村の所有ではないため、木を伐採する場合などには許可が必要となる。それを省くために、払い下げを申請しており、村の所有にしたなら、紅葉などを植え、秋に紅葉まつりができるようにし、最終的に、春には芝桜、夏にはアジサイまつり、秋にはもみじ祭り、冬には雪まつりといったように、四季に合わせてまつりを行えるようにする。

澤村和明村長は、「村民の力なくして活性化は不可能。勿論、メインのジュピアランドひらただけでも不可能。活性化するには、まず「平田村に住みたい」と思える環境を整える必要がある。平田村に住んで、郡山やいわきに仕事場を持つ。そうして平田村の住民の懐を豊かにする必要がある。」「行政に頼るな。自分で出来ることは自分でやれ。そのかわり

利益は自分の物になる」「自分の役目を考えて欲しい。自分が出来ないことには、手出しや口出しはせずに、その役目の人を信頼して任せる。そのかわり自分の役目に責任を持って全うして欲しい。」といった村長自身の想いを語っていただいた。

村長に出会えたことで、平田村をどのようにしたいか。そのためにどのような方法をとっているかを間近で聞くことができた。私たちが考えていた活性化の方法との共通点をいくつか見つけることができ、平田村と同じベクトルで活性化に向けて歩んでいることを確認することができた。地域にあるスポットだけ利用するのではなく、村民を巻き込んで活性化することに前向きに考えていることをうかがうことができた。



酒絞り体験の様子（資料 13）



松本祐一准教授による搾りたてのお酒の試飲の様子（資料 14）



村長を囲んで参加者と平田村の人々と（資料 15）

参考文献

出版物

- 宮田静一(2010年6月) しあわせ農泊-安心院グリーンツーリズム物語 西日本新聞社
- 山口好昭(2004年12月) 食と邑おこし 長寿の里 桐原探訪 文芸社
- 寺島実郎(2011年8月) 世界を知る力 日本創世編 PHP 研究所
- 山崎亮 (2012年5月) まちの幸福論-コミュニティデザインから考える NHK 出版
- 永井一史、山崎亮、中崎隆司(2012年5月)
- 幸せに向かうデザイン-共感とつながりで変えていく社会 日経 BP 社
- 久恒啓一(2012年5月) 図で考える技術が身につくトレーニング 30 自由国民社
- 後藤哲也(2005年2月) 黒川温泉のドン後藤哲也の「再生」の法則 朝日新聞社
- 小川雄一(2011年11月) お花屋さんマニュアル 2012-2013 誠文堂新光社
- 和田充夫、菅野佐織、徳山美津恵、長尾雅信、若林宏保(2009年6月)
- 地域ブランド・マネジメント 有斐閣
- 原田保、三浦俊彦(2011年5月) 地域ブランドのコンテキストデザイン 同文館出版
- 安田龍平、板垣利明(2007年11月)
- 地域ブランドへの取組み 26 のケース-先進ブランドに学ぶ地域団体商標登録の進め方
久繁哲之介、地域再生の罫 筑摩書房 (2010年7月)
- 紺野 登、地域デザイン企業 日経計算新聞出版社 (2008年2月)
- 福島県県統計分析課「福島県民経済計算の概要」平成 22 年(2010)
- 東日本大震災後の福島県推計人口 (平成 24 年 2 月 9 日、福島県復興・総合計画課)
- 平成 22 年福島県観光客入込平成 22 年 (2010)
- 福島県農林水産業の現状 平成 22 年 (2010)
- 福島県農産物の輸出実績 (県農産物物流課調べ) 平成 22 年 (2010)
- 多摩 SOHO ガイド 三鷹 SOHO 倶楽部ガイド (2006 年)
- 道の駅「ひらた」紹介パンフレット (2012 年)
- 「平田村」紹介パンフレット(2010 年)
- インターゼミ 震災と日本再生チーム 最終論文(2011 年度)
- 東北「道の駅」の震災対応の実態と新しい役割 多摩大学総合研究所 (2012 年)

インターネット

- 平成 17 年度限界集落における集落機能の実態などに関する調査報告書
<http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukei/communit/pdf/17report.pdf>(参照日:2012年11月8日)
- 福島県の推計人口(福島県現住人口調査結果)市町村別人口動態
http://www.pref.fukushima.jp/toukei/html/01/m-jinko/23_3_y9doutai.xls 参照日:2012年11月19日
- 総務省統計局 年齢(5歳階級)、男女別人口(平成24年5月確定値、平成24年10月概算値)

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/Xlsdl.do?sinfid=000014905014> 参照日：2013年1月17日

環境放射能測定値（福島県測定） 2011年3月20日～2011年4月18日

<http://www.vill.hirata.fukushima.jp/whatsnew/data/folder.2011-07-14.3251514296/housyanou1-30.pdf>

参照日：2012年11月20日

年間被曝量簡易計算ツール

<http://radi-y.com/> 参照日：2012年11月22日

http://wwwcms.pref.fukushima.jp/pcp_portal/PortalServlet?DISPLAY_ID=DIRECT&NEXT_DISPLAY_ID=U000004&CONTENTS_ID=15846

東日本大震災による我が国経済への影響

http://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/keizai_prism/backnumber/h23pdf/20119102.pdf (参照日：2012年12月22日)

多摩大学総合研究所-道の駅プロジェクト

<http://www.tama.ac.jp/guide/img/tamagaku/vol04.pdf> (参照日：2012年12月22日)

いきつけの田舎創生事業 <http://www.ikitsukenoinaka.com/> (参照日：2012年12月22日)

NPO 法人 安心院町グリーンツーリズム協会 <http://www.ajimu-gt.jp/> (参照日：2012年12月22日)

山梨県の健康寿命について

<http://www.pref.yamanashi.jp/koucho/radio/radio110603.html> (参照日：2012年12月22日)

健康長寿日本一 YBS ラジオ <http://www.ybs.jp/radio/y-index/2011/06/03072000.html>

多摩市役所（放射線量） <http://www.city.tama.lg.jp/kenkou/kenko/013808.html>

平田市役所（放射線量） <http://www.vill.hirata.fukushima.jp/kouhou/data/2012-12/201212p8-9.pdf>

